近衛の[illegible]

特別
へ 12
1077
40

早稲田大學圖書

刹
1077
~~39~~ 40

特 へ12 1077 40

夕霧

五十歳

私鈴虫巻乃同秋より冬まての事あり

大将念一条宮給事

一条御息所煩物気移小野給事

大将送僧布施浄衣等於小野二宮乃返報事

八月廿日大将向小野訪御息所病事

押入宮御方給対面事

明日還六条院東御殿給事

大将遣消息於一条宮事

阿闍梨律師語ル大将事於御息所事

御息所召少将君問大将夜事少将君陳答事

夕方御息所与宮御起給事

大将来文於一条宮御息所見給事 御息所ゟ之御返事

大将殿渡三条殿与雲井雁把給事

雲井雁奪取御息所御返事

明日大将求彼文於席下見之事 大史

大将依坎日不出小野先遣文事 後く 為監為使

一条御息所思損文来事俄絶入事

自愛之訪一条宮給事

御葬送日大将於行文海宗事

九月十三日大将渡小野給事

海宗之次ゟ一条殿前給事

海三条宮文遣文於小野 宮ゟ御返事

六条院同大将子一条宮御中事
大将君条六条院之次同一条御息所御
忌給事
付巻詞ニ一条乃宮を所のいまハあら
ねもんそ時るちむとおもふにゆくりこ
とせ乃あさことそなる無よしそあれ
とゝく
柏木衛門督去年さりてことせ秋
あるつことゝの給し

一条院宮丁務俊一条故宮事大将ニ
大和守作付事
一条宮移徙事
大将俊東對南面給事
三条宮人々步付事贈歌事
大将俊六条院花散里御方相
給事
大将ゐ三条宮雲井雁怨給事
雲井雁出方退給父大臣給事

大将渡之条女当寺所作り　次条

大宮作り

大殿献消息於一条宮事　蔵人少将

為使

藤内侍送文於雲井雁許事

藤内侍雲井雁二人御腹男女君

奉迷教事

夕霧　花 巻名以歌号　詞には只夕霧と

ハカリ有之　箋

河 山さとのあはれをそふる夕霧に

立いてんそらもなきこゝちして

花 鈴虫巻は八月十五夜の事なとく

まり此巻を同廿日よりの名まての

事なるへし　源氏五十歳

秘 源氏五十歳鈴虫を八月十五夜まて

とうけては此巻は鈴虫の巻乃末よ

弄
十二月までとかけり
源氏五十才給ふ巻九まの秋より此
まきりうつろふ名までの事なり

ゆめ人の名をとりてかくしぐり給

夕霧

河
展季（テメビト）　文選　文真人

秘
夕霧ニ英法する名をとりてまた人分とこそ
私さらしかり給大霧とかり夕霧の指
末ハさくすとをわとりし事とも
おちえしてあり
むつしと本末ねよいよ見せり

竹
周意

柏木の遺言をこまねなりし
ゆゑにて所もあはれにおもふところ
秘
落葉宮乃母御息所
をしめりけるにても
秘
夕霧の名申し
えつるをきこえ給へとも
秘
女宮乃きこしめすはなしと
なり
世のかたともおもはきこえしもせて

夕霧の名
小野といふところに山里を給へるに
花
此所は源氏の手習巻にかの夕霧乃
御息所おはせし山さとよりはすこし
こしいりて山にかゝりける家なれ
ならで山城国より小野里といふ所
二あり　一は愛宕郡より小野里
河内は又愛宕郡より小野あり此小
野は愛宕郡の内にて右所なれはその山持

川のほとりなる所ならん成へし

[秘] 荒島にあらす是乃山乃葉

惟喬の君と此経の人家所わかり

なるへし　義

[河] 伊勢物語惟喬の君とこしられ

うしてとみりすま給へるの御

綾千家乃大臣してこゝをとうしな

ひそ洛山さと此心からそけするとの

まうけのまひてこ乃ところとひえ

あはれなりときく成へし

さくらより流いのさと此師にて

[秘] 行海恵心僧都とひそりけ義よ及へ

うつさるし共平生活縁の人なる

成へし

[寿] 非とも多くへさるもうし同

[河] 恵心僧都千日山籠間に安養尼所労

ありけりさうり松まてあり

ならひて対面事行り模此事也

黄山ノ義以
？あ此序加之

小野ハ比叡坂本也今の上京也

義 律師唯拠恵心僧都十日龍山ノ
時安養西岸ノ事あり

私義ハ用河海義也

むかしのちぎりの君さらハ

秘 柏木乃兄弟とハいふ 弁

弁此君のきこえあまたにしもおもひて

秘 柏木のきさしつきの事し 柏木此遺言
せしくし 紅梅のおとゝし 弁

河
柏木権大納言 舎弟 紅梅右大臣也
蔵人母時平公女 早世 天暦元年十一月十七日卒 年卅六

清慎公 ― 敦敏少将 父公歎事見後撰あまたさこえたり
ありけるを東海ゆきて
右大臣 諡廉義公 母同敦敏
― 頼忠
天慶五年十二月十七日侍従其年四月七
二日春宮亮九年九月十二日左兵衛佐
天暦二年正月廿日右少将十年三月十四日
権左中弁天徳四年四月廿二日左大弁

准紅梅右大臣

弁少将右大弁 右大臣末事相同之

義用此義

同
弁乃君ハ藤葉家なり心とゝけしせ

こそありつる涙なりてなしなりけるに
六井てえまして語つると
弁君いらし絶えりけるも絶てや
あさし女の母とも絶りりて子
されしかは六めて兄まも涙なる見し
語りねとし
私秘といふこそれはうなりける涙まて
なし女ハ井ていまして云ふて語
いれとアリテ声様く伊勢物語に
伊勢の母なそいまそ語りんなて
いひそれハとアリなてといわさと
なと云心なるへし事の伝なそ
なりてけとし　天文廿一六八能く以
上秘
私三家なる詞なく此とされ　不審
是なりく按し処別義なし　尚
道るこ家本とみる之　但此秘ノ
義には及へからさる者乎

これ君ハいとかしこく作りけるかな
秘 夕顔し　弁
夕顔ハけさしるてそのつらひ
よりきるし
その施せしやう忠るとやの
行布施　浄家
義 施法するもの時ハこの若浄家をとこは
きまり
きてのせうさき

義 しとの世り作せ書とら今本し
よめしとおりしれへく
夕顔あをつりみくさく人すまく
きりかくてりきこし行
秘 女三宮御息所よかりてかさをよ
也　弁
いなしえおれしう
秘 夕顔の兵　義　落葉の宮経て
見しゑり

小方けしきとり給へと

秘 雲井の雁し

異 雲ゐの雁の排景しのかへし

とつりしとて

秘 夕霧の花し

八月中乃十日ごろなれと、

河 擣衣 拾遺同秋し 奥入

義抄出よ八月十五日まて云るなり

然ハ廿日の法花斗ん

異釈閑 法説九日乃事なるへしとそ

又云々中の十日ごろ如へし

山さとのありさ海れゆりしそれハ

夕霧小野をとハ給りのうて

御前をくしかて

義大将ハありさの気色しと借するとし

それと畧せて進つるとし

松かさきの小山の名

河 松崎山 山城国

花松か浦ハひゑの山の葉氷室のある
所し
さるいふかの縁と
義ふかくさ山のかねとなるし
秋の寺しきにて
飛けしきつきてトなりてよきさ
つまそ君へしこれまそいふかる
をいてり
義四時不変乃歳も秋のもしきれ

もそいやされるし
能見にすくと泥くしる家居まれ
秘これよりハ小野の山ふし
并小野乃里也すし
ありれさこ集うさる
義小野の称し
たんでんとおりしき
義本式の夜変といふ縁とりて
の所そての古今変なるへし　例

さんさんとおかしきこと
とめきそてまつり給けれは
秘 落葉は京よりましゝ御坊とのたまひ
しこと
人々よろつ給ひけると
秘 御のけ乃まゐしきこえしつゝ
ね給へあけ
家乃ゆへきこえさせまいり
御落葉あり

落葉のおかたより落葉方へ夕霧と
ほしそてまいらせし
御せうそこきこえしつまふ
落葉は夕霧より御息所へ乃せうそこ
や給はのたし給
いそかしけれは
秘 家と所乃給へつての給ひし弁
落葉は夕霧へ御息所の返事し
私此段常ノ義は御せうそこきこえし

清とふとかきてはとくしきすくと
いへり御息所よりくつての世ゝ
こゝの詞と見るし
義ノ義ハ夕霧の世ゝうことくこ乃
こゝこしつくふあしきてはとかくしき
奇くとふより御息所の返答しさて
みとしう危しく夕霧よりうこう猿
給しといふより世ゝこゝ此詞しこゝ
此段義を案するに先は息所より

くつての世ゝうこありてゐこう猿
給しれとくりといふを夕霧の返
答と見て可然
あうしこ給りとうに
夕霧の給ふ詞すましまするとは申す
むかしくありては御礼をとゝ命と
ましきうと世のゆくは今すうし命
さもうけこあしきこ心乃流こさうし給
とみり

もつて擣衣し衣をうつなりと
秘 夕暮の詞 供ますへきかたと
申すりハ隣里なるよしをのへ
のちみえり
ことしかね襟の衣しつつひ
弁 秘 小野の山庄れす
かりそめの旅寝乃さ庵し
さいりすてさとさしねぬふ
秘 女客と旅亭しのすふ

あすさの御世しさこかゝふれと
秘 こやと頃の此方れとなしとし 弁
まいのかねれ君なと
秘 小かねし こやと頃のあはれ大和なるら
いりとし 萬葉集といとまるへし
かりまいりさえれ
秘 夕暮の詞
とし法とふつりて
秘 柏木の後之年まかり侍るし義

弃図

梅かゝし弓さ海も

弁

好家のへきとなしてれおくいらぬもう
しとし

よみひつりとおろうろみわしれとり

義

着幸浅官乃時のり

住のすきてるおもよ

秘

夕暮そころをふとるまさるほうて

ゑさしそのこ世深の事ともおるまし

ミ事とおりふとし

さるまうがりすくしうあれてと
しるべへ

義

情をおもし　自讃ノ詞・おきまてみ文
字清てよむ

義

同わそて深しおるしもくしう

秘

ハ直ノ字の心なるへし
おきそめて文字古語湯てよおると
文めの流んとゝく　いうく是ハ夕暮み自

嘆きのあまりに情をおりて懐妊する
人ハいろうつろひきよろしく
私云当義也丁周之無元私抄之
義為後学注之
(何) すくしつゝあまりて
健くしり あまさるなり。
(花) 不知年ふる人の友乃ありなとい分
つゝや
(弄) 女之事なりとゝ
得閑之又続ヶ分

(閑) 此事
おもふて (注) 心得之 又あまりて 情無て
思ふ心をまけてあまりてぬるとい一義
もあり
それハまこと中くれいしく
(私) 義まりいきしもひらきをし
そこよりれ字に人のまさりそれ
みえけるまとくつのなし
私云此文の字すの時多くて此文ん

しうきハすそしわうきしらまて
見るべし
きうきこし給ハさあるかきうつしさまに
花
花よりハ家の御紋し
秘
藤葉の紋紋し　きうかとハ御息所の
おもし
かり物八寺を
弁
紋をも所乃ろうりよや人さを
見とるそうしうあもそあし給

弄
依中将の紋紋章ぞえて家もよりこ
給とし此紋人として女家の給ひお
〳〵し
二の家の御せとそゑとねよとりて
秘
夕顔みり
弁
夕顔君よとりて女二宮の紋消息を参
てゝ紀とつこれも女家とそふゆへと
みかり
義
藤葉の紋せとそこ見るとりゝ

夕暮れうるりしきへと見せてうか
色なり
心くはしきはすやうと
花
花ハ夕暮乃無常し　あきと花しらる
はありさ海すくは秋の心すか
秘
夕暮の詞　夕暮は花のさきは月よ
うふかりすけきすくみとうすゐ
おとらひきく　　　秋乃御
色なりそしてあまとし

かくしけみこぼれと
秘
こゑと所乃山すと何うとしも女二
こゝの春云てあるとし
あとありしは事山かり海すと
秘
秋の夕きり乃志とあはしはる
またれとし
弄
あとありしは事は　　女二種あ
ふるをうけき経やすしこれてあし
こ方とかきやのちひさむるかかまそ

此息所あひしらふにとかくも家の御
こゝろを御息所への事によそへ
らるゝなるへし　抑とありしこは
は御息所の事也　これしかしらん
まて女二宮あひしらひて終へかしと
先は浅義也　あるひはかなしきの心あり
扨ては家のしのふまて夕暮の
哥すかれてあひしらへは家乃此事
て然後花鳥ゝ抑とありしは家と云

一　みか
一　あひしらふにてし
義説莫乃こゝろしるよしもあるへし
ゆへしられしかさゝは此序を所
のなし
あしあかつきの酒り
秘
我身の名をしと此世す所のうへ
乃ことりなしのまへかはらひなし
とし　并

私此段いさゝかつゝしくこさこも
心ろうしこさ候得共ハ御息所乃
事当分かそうりまけくハリ尤
のまけく事なる母の御人々なる由へこ
とれ落着成との事此末ニ甚子細を
いひのふ家々かゝしけ々まれとトハ
落着の事をとうくもハ恐かれとも
ト人ゝゝ御をとなりし当家候何りさ御
まとそれくしこさかとへこて

まうみをし給ませてハとれハ落着
相末の事なとの候まけさしされ
くしくまゝをませてハトリまり
急いうう候なし給ひゝてさトハ落
着の候んまくしうんませてハ
御息所の急いうそんハまゝん
ト人事ならう候急あなま良かれ
こさ事なれ御あとをしさうりさ
こゑんさすもうりてとをすんトハ落着

乃御こゝろも此息所の御為なりよ
くもんと非常にみてそてすん心を
つくさとし　むかしあるさきあり
おもし捨つりて下ハ萬気ハ為
萬乃為なるを此息所への志
まそりりちよしのよとの事
此分なり
但又いさしかもしき所あり
おとおりしちなし御ありさ後

みとくキリテ心ちくへし其右ハ為
萬乃御世ゝそことよあるゝをきの
心ちよすりてとらかをとけて惣さ
中ノ事られ九さゆまかとまり
ちなし此あるりさ海すゝからねるそ
とし其時ハさ遣しくしこおこなる
是なそまつりみとし精まそハトハ
又ハ此息所のさ遣しくるまん
まそりとし為ハつさ此るもし行

りんてとトいふ文字落着乃事なり
此哥の義ハ前よおなし 此義
の内よそろう見えし 思ふまて
稚奥て然し 此巻ハすへしとこそ
くう布よ文むつかしきこともとせさ
不筆法し

此ひとくつくもきこゆ
きつうくつくのらぬそし
日くらしの母すりわよ見え竟しきこゆ

われはきりきつて山のかけいとく
きゝ心ちするよ日くらし鳴ときりて
わさきりにおもふかすそしこのうちすひき
不多も有しうきこゆ

此歌氣を德乃ひとふくし

[illegible]
日くらしの鳴つるなへよ日ハくれ
ぬと思ふハ山のかけにそありける

六帖
日くらしの声もいとなくきこゆるハ
秋ゆふくれになれハなりけり

（日）ぐれのミや あはれと云ん 日晩乃
をくらけの山とすへし
（日）あら意し今もつきしら山の
おもうにさける山とすへし
（義）我乃ミや あはれと云んし 此外孫
物ハあるまし
松乃ミこそ 本ぶく
（義）風の名物とゑらし 物をあはれ松
乃哥也

ふじんの経よむ
（義）聊しえん君もすくよむへし
時（じ）ありてとゝこほらすまゝ
時もあるへくよむへし
（義）時じありて 間時ありて又ハ 時じ
ト云
末川ハ忍をわするゝ故も
（秘）不断経時とひきてよむさるへし
よく経ハん心ちもすへし

秘
夕霧より
こしかたすゝをとして
義 服乃加持ハ高数なるし
陀羅尼いとたふとく
義 是ハ千手陀羅尼なるべし
いとくふしけれし結すりとて
こやを下れにふりむかひかし
かゝるまつとひて
こやを下乃流かへし

急ひ処りあまたもきこえさりけるに
趣別小野よ人すくなる見れ
下の脱音へ来て落葉の流そくに人
もすくなきし
せみとをもらへてつくき
夕霧札ハ中すり
音乃急くその打乃りとおもて
秘 山ざとの哀し
いれて音とするとらへり　　河濱書ニ清陽み

まちつるもみえしを
秘 夕暮乃鐘 并
山さとのあはれをそふる夕暮の音
いくそうもあさき心にして
秘 此哥巻乃名とするより夕暮のさま
表逸し
并 此哥ハ巻の名とせり
河 此歌よりり夕暮を題とせり
夕暮の哀ハ何迄ね草まくらゆふ称

するかもおかね君也
離愁夕暮惺人枕上愛朝雲出
馬鞍　山庄守　白相公
義夕暮ハ鐘音よりハあはとまる物也し
されとも其ハ曲言ハ不及其縁
夕暮の哀ハあはれてしけく
閑 おもの待るも引無別夕暮ハ偏云て
秋の哥よりハ逢せてまねし　さきすへう
表逸とく

返旅家集

山川のまさとなりて川音もこ
ろかきする人はとしめれ

秘
外二家の返事心ちうきうるとはつまり
人家にはいうれ家の夕暮乃くるほ
き心のありけるといひりまかす乃人
をいとそめしとし并肉
義ありし心ととめうる人をかうは暮
乃まうさうてもと海もん士ふ作
多ういてんうもあさとあるいふ家

さといそうへしきかに心そうする
へとわとしめれとし
私此兩義あしの義は尤をあり
うしされとも夕暮をとゝめうる
處うれ心ありされはそしめの義
ありしうう人されは但あり
尚ことに人家さうそうゝ迄てそね

行
曹公と云人雲夢澤ヲ行て大霧
にあひて兵を迷失えし　好忠　山里に

音此まつきのつくてよいをつきん
の秘ハ是てまし
私結抄引云すなし又此義を不
相当如先哲哉く
中元の日のことなる
（秘）夕音何音此ふることを元ともに
在りハせのも　河逆ヤラフ　日本紀
（秘）追儺とおもふ在りハとらふあまよかせ
一義

（秘）追也しのかたし
法ことの紀へハうの旅のたこそ
（秘）ゆやらの事なるなりね身よハ法こと
なりとし　私ヨリツリ示モ十年身下
こく　堅秘
義つきなきさんの亲りうてらんはそ
儺結へかれとし
私好名よつきくしうりねへとく
ふかく伝しきしいかりまの

はこふきゆへにことこえぬかな
やしなひもせずよ
（秘）家乃かぜ
いまさらけさうつしをのするよ
夕暮のこゝろ大夫申し
人とかせは
（秘）夕暮こそしくとめしてのそのふし
にほひさそのさしまりあらかさる
（河）右近大夫将監し　右近将監乃叙爵
しらかし
私につきといふ夕暮右を大将すると
こそしは将監しかしのは叙爵し
叙爵しらるかへいと大夫となし
ならしめるのは使らいふべきす
（弁）さうりとし
ごとんすとぞ
義 護身　荒も加持し
かのかうるかな

律師の居らるまし
こまりれさうつつせよ
義 従しいてみさうつへきとし
くるとのきちらうらん
(義) 山城国愛宕郡上内小野てハ上賀
茂領し 栗栖てハ下社領し 寛仁二
(官符) 又の治郡ニモ小野 栗栖
也ありと見ハ別也
義曰 小野て栗栖てするを相蘇ニ

野ト云字をとるへき成へし
一説云ク音ハ在所云栗栖ハそて栗栖
野ト地所ノ事ヲ云語也ルとも
(荒) 丁奉寄賀茂上下社ても事
上社賀茂て 小野て 大野て 錦部て
下社 栗野て 蓼倉て 上栗栖郷
(不審) て出雲て
今案 山城国愛宕郡上内小野てハ上賀
茂領し 栗栖てハ下社領也 寛仁二年

十一月春日陣定ありて広前とすき
まとうりね此ね給よくるとのれさき
わすらんとうふハ此ふとし文六治部よ
色小野栗栖野ありされとつふよ
ありまむ　野上花

秘
河海のせ～所乃名同し
未決乃事しくるとはハ勧修寺の
鳥し花鳥は海よ伊治る
一統ク雪の在所のとと　とし合別

せむしして小野とらふよつきて給
つるとこされと花鳥さうつく云ら

異
筧一郡ふ
一義云賀茂人の文書よ賀茂らく
くるとも野とらふ小所ありとこと太さハ
心えうらし東のくるとも野まくそ
みへうらど一統ク雪乃立所ハ走
ととさらはりて小野とらふよ
つきて広前すれハ此のまれとく

花為る宇治郡の　小野　栗栖野
なりて賀茂須りし小野くるとなり
とけり芭蕉は小乃小野くるとなり
然は不審なきにや

同

くるとは野にてこそは音しけり夕暮の
雨をとこしまして大ゆかりて乃
すゐとなく

松河海々処をのせまでてら見
の湯は義の義をむ用色し苑

為すに小右記寛仁二十一九五陣定
事をのせまでに繁かして要なし
仍略之

あまやかなしと
右をね監の非なるし
見らいとをくしられて
評
夕暮鑑

あさりのおかし猶ませて
阿闍梨は律師となりけるのかふし
とさりめさそうなりに
秘 うやと可れあるへ端なりとそもいふと
さり
出世うちとささえつるなり
秘 さやと可より事ろ乃出世とそこし
義 夕音のまへしてて出世とそこして
紀はつきそはなるらし

松夕音は世とそこ紐へされ
秘 あさましうてみえけるに
出世とそこつくしへし 昇 花鳥
なるともりさすへきかさみなりけれ
義 けるかはこうろとよわるへし
あの風るる
なさすらはいけかねのるく
昇 あせのま家し
みきねうらそききゆれと

弄女二の詞
私さゝやくこと
弄女二の詞といふなり
かたらひてさゝやくなり
秘 夕暮乃詞
くれしかたまでと思ふ事のミ
落葉の心に花をちらされぬると
口おしくおもはし
いとゞ涙にくるゝ／＼哉

秘 夕暮の詞　花
御名ゆるされては
流ゆるしきよそしをちらしらは
みはいかにしとし
手向くづけ行るもひと
同 君にわかに涙にかれにくきを
ひとりもちつねおもそふけり
紫用付川哥　同
いひしらね流来しきの

秘
いふ佐きかくるうしとし 尋
されいとゝとに見ゆ
秘
我ゆくハかくちうしとおこゝしさりし
ふりさらにとゝ越へしとし
尋
世のさこしよう〳〵ねよりこし
危也しくるあえるする
箋
見いくうらうえてつる種し
うらとけ須へ家まての
秘
うらくのほ姿かし

尋
うやうの事ハせひうけさるゝとし
見いとなりそうふけ行よの春しさ
時候の言気初の作しこさ絶よの人
うらし
あらぬ事のあいつけ人
箋
多く大うこのあそひ忘ぬあそく
しきへりとし これまてくる音の
心中とかりひゆるへきゆりよううさ
ふしうり

うしもさうしのうき乃月乃よの
そちらき程
秘 御格子をもまいらさし
篝かしをもあけならし御のて
さき弁如なる出手
秘 乾き おりし出つね
秘 夕暮の程
より入ねまて出連しゝき
弁 夕暮の頃

秘 好色のたよりつねし 侍るのつそき
このましあるまし
何事もやさしきの人こそ
秘 夕暮の朝々殺つね たてきつね
よしそそく事のあれ 此方よ
こそよれをとへ分し
えらん出つあらつましき
秘 うらまれてつきまも出ひのとあらしと
おどしゝるし

世中をむげにおもしろしいふね

（秘）柏木にうつまきのくは世中をといへは

ねよそしもうしとし

いつしか為ごさと

藤葉家の説

世をいつはる（秘）

藤葉乃御説

めさましう

（弁）うちそしうきうしきし

うきころうへ法ことを

（秘）藤葉家ノ初弁

（義）藤葉の柏木にうつひなる事をいひしう

きをいひしなつけてもあさまし

しけきとも又いつにいひなせともふ

みそとしそれも我なりけとなく

きうこのまけきそとし

（藤葉家）これのこやうさ世をいきはためしまて

ねきそふ独の名をとくれ為ごさ

秘
おほよ世中をさとりあかしさとる人も
みしかおもてすとりの人なりとも
なりとてかの心あらはさんとすへ
しやとし

秘
うき世をしらぬとは指南によつ
ひ給へるよし傳受よりとりの人の
事し さて人の指南によりける
をさく世をわりし所との時より
又人のよのしらへは誠葉の

うき世をさまよふ人のためしなりて
うきなをとくるしいてんぞいつ
みとし

弁
みとらさんとき 名も ・
よろ心母院にけて

秘
角しかにもとこえさるとりの
院にけのすへかし 筆

弁
ク人にゆかしらし
いろならひつかことそれて

同 はかなさをほかにもいはしひつゝも歎き(?)
秘 此二首のおもかけし 歟
花 世の我身をやすき世としらすれ
よろこひの人は夕暮の世をとこそしるまし
のかとおもひの中にすとおもふよし
よろこひは心のうへにしるなり
なれといふよしのひとつをのそくる
なるへし
けふはしくさこそあるらし

秘 夕暮ノ詞し 世中をおもしろく
あはれしつとなしあはれし
同 これはなにしろきとしそし
歟 私 世中ノ無下ニ成シ知ヌヤウニ
トテ云ヘル事ヲ云フニヨミ給ヘル夕暮
備ヘタルヲ心ノ後悔ノヤウナレバ
我ズムジタル事ニアラジト也 不審
義アリケル
又世ノ無常ヲ知ヌヤウニト云ヘル事ニアラジ

ウキコヘツカシトモ以上事

私秘閉事ノ後ノ義一段ノ趣ニ

おかたまはいはれぬまきぬとさせすとも

くちなし被の名やいふ事

秘　秘とくしすへし

義ハ名号乃事ニ面白とぞ

桐木の事ニくちなし秘すれて

夕きりのねまきねときせすとなれ

名ふくれしとぞ

ひさふるりおりしすりねへし

おかたまの名をつけて見るへし

くちなし秘の名ハくれぬ程ニ一首ニ

我ハまたたまのみへしとし

うかりまくひのきなきしと

全體ニとしふうる事ぞ

あしとぞ

名号ハ御めさま也

義 名号ハ名ねをもしるさハまるへし

おりふし

こきみの事も

放孝し

秘 柏木事 昇 花鳥

遺書しかきよおりしおとんとい

柏木のあおもりとおもひとうしむ

みし

此心のうちおもうれい

秘 京乃此んしう連いとい柏木し

昇 女宮心よ柏木の事をとさひのすふ 花鳥

まそみきくれうちよた

花夕夢乃小方い柏木の連枝し

大殿すをのさうしさひ

秘 致仕大臣し

昇 致仕大臣事

夕霧もむとし

院よもいろに

秘 朱雀院し 昇

かしによしこそとも
寛平のきさい宮の哥合の花に
よきすと人のこころとはあし
くもりなし
花すゝ雨乃こゝろもきこえんも
弁
一向きこゝろもにみえな
ましとて
雨のいすゝすかのことし
関又雁のいとけまと

あさましやとおもひけるに
秘
夕暮の紀
おもひいでらしこれよ
夕暮れは花さしのけと雨はおもし
これとて
うきおとは雨しすき雨と
秘
雨はれとおもふよりまてうしはてく
とや
かしこしすらしやすらひを

哥

夕暮とすりてもなと女房の
おもひとも夕さりのさひすりなん
きりてさびしき事〳〵ものうきを
も心つくしくと女子ともとおもし
の夕暮もさびしき事〳〵いへるとおもひ
てりふかや

さびしき事〳〵と

秘

我仏なりも何ともさびしきとを
おとしてりのすふし

義

落葉の夕暮とうしてさびす
しやうらうとおもひてさびて
流転布おもひ其時我仏ともえお
さあしとしさといひ夕暮の用捨
そとし
さびしきくといかさびて流転
あらん時はりろの夕暮りてを
ためてもしきりとは我さびしきを
くとし白浪脱布さもなし

と用ゐよかくおぼしゆきさうし 地
おり夕暮の実法するゆへなりかくの
ごとし

(秘) 月もとにすゝき夜御座
まあ人へすれども
こゝ御ミえりも

(秘) 夕暮乃自の色し 昇

(夕暮) あきさ原や打ちの露りそちつて
色へゝ川暮とゝけそ行色ぬ

(秘) 色ハことゝもられけは八重なり
暮とつゝ色すゝへしとし
義こゝと出る時は萩乃露よれ達
りまは八重ゝ川暮と行く事を
非落とひよそ落葉へられへや
ミゆ

(同) 萩原やは錦葉乃称し八重ゝ川
暮とゝけ行は色乃色ゝてあらん
事とらへり又錦葉乃よう暮とある

よしや花鳥のうさ

宗
夕暮より夜はねまきて草枕さひ
まちてもおかね君ゆへ
よひゝすへてわき

ねまきさへぬれたてさ世話のしらすと
またの風か世話御心法してそれと
こゝろの行

秘
うしよくひらしらへておしのまへ
さもとし

竹宗
世とてはにらねまき夜よるわおもき
こふる涙のさきすみまわ
しろとも君もいさすんわかれ夜
うはうきれは我のきそ川

養
は面前とひそう花鳥よりの夕暮
よ夜のねまし　おさアリ

私は約よつて　いさしの今東行
ねまきさねのすそては正哥
まうけてらんし　藤原や折

この歌又八重さくら寄なと詠家と
ねかはすあらきてかくよありそ思ひ
うきよりみて世の世の心つゝ
こそとふくり事河つきよ世の世
なりけるこそ法る後説めさて萩
乃歌八宮さつ歌ともくるふ人に
ねまきねとハささてくれこれまて夕
歌乃さるあれとねよあかれ萬葉
のこつりきのへあまきねそとせ

御息所をとゝてひきうてせうる秋な
つゐのこゝく歌もこさし歌も晴て
えつりうつハ人乃ふ書つゝまし
さあとゝらふれめ

萬葉集ハ歌れ集りもさる事ハ
人とるゐしされた定事のうけ
まハねまきねとハらふて
伝乃とりんみうた

河渡

みることをとくかへらひてみるへし

心のよういうこそ奇妙

秘

義弁同引奇用之

実事にたすくことはをおかれや

定家卿之

もけ捨ん草葉乃露とかこりて

たまとねまさ思ひとこせんとやいふ

秘

凡人は物まよひをかきてとこそするか

あるをとうるこゝろいさせんとしるよ

其心のかりとや

義ハ下の草葉の露ととまんねまさね

とられよりきんといかつゝをる事

られと物くさけて君かへしからとは

かこかもの心也

人母ゑく人家心をせくにまりて

花

めつら志き色よりひのようする

秘

世の人ゆるかりて心をせむ家へりて

みすまさくしくなることし　弁

私見は心をせ所り周家あゐ人

なるへし
わかちよむやうにきこえしても後あしう
悔しくやと
閑 かやうに藤葉の名によむやうにて知らん
行末もつれなくいあやう悔しからん
ともひかされてかへるまゝり見も
実法なる心也
とかくおもひは女君乃
夕霧此度之条也　女君は雲井乃

属し
六条院のきんうしのおとゞ
秘 花散里の方　花
まうちきみも
錦さへいまだ晴ねし
ましておしこよは
秘 小野の方ともひ庭のまへなし　井
鶯閑
花 雲井此かりの事し

夜毎といひてさようたに
秘
花散里の君のかたより消息しと
きのふり
此中人よまいり給
源氏乃此あへし
花
花ちる里此前し
うしこよ此を
花女二乃宮の小野へ此をまうせ
めらで

秘
小野へし　引
母かうにあさ海しらし
花より落葉乃尼し
うけて六り給ハさうんよ
引
多しふ源氏む小宮をきそとし
またしいねかし夜を
雲花と自然さうれしみえん
つもりかきてきうハ世ひつてうるせ
こあうしかふ唐さとし又あらひ

うくれなき世なれとものつらきて
わかせなかやるもわかんとし
くまわりしまにさこうしりさうん
秘 什とかくるやを両へ戸人の待れ
なしとや 弁
義狭旆をとうやす両へ出川すくに
人のやせうしとし蔭菜の危うう
ねみす文実みすのなさき事とあく
まはすしとひのなかし

あやこの法中とさこゝもふ
秘 ふやうの事ハ親のはらくれ事常の
ふくひしされとまへ人の口
まりさうしめさ竹のさきさかまとを
おうとそ
あしあかうりふさ
さの丹まとのり
三日乃よのりふるくろし 良方
縁ホ以数し三日のよれりふるハとし

うつりたまけれはものまいらすること候む
なりしそ　以上弁
私弁にいつれも先例に及さる事あれ
共常の事に心得へし
ことしを侍りけるに
実事なりなきことりかて何なれ
おほしてみえくしては用捨してや
さねとし
弁
くてはまれなる説のなとにて後くトハ

此悪所のことはや又云人の事
や弱し如何に母の書の事と云へ
由緒て何もありけるならし
是は女房などの方へや事なるなし
心はさやうに所々の本よりくるし
う派ましきまありけるに女二の
おもしろくてなとさえや心
なり
私云此弁の事義皆相當せ候なる

須するとく并二意いふやすて而へ此
事とおりのまゝにかせうしと判
おしみかくいふやもて而へ此事
と事行りつかかよりて病中よね
おりしこれていいかゝんと言ひ
てこやと而へかさねとし
まやしら何ゆゑなきさ結して
秘 意の説詞
義荻葉乃ちらとけしる常にそる

そて夕暮に見し事し
こゝろのおくやまち
まやまよ何ゆゑなくてなつかしい
荻葉もちらるおやまちのいおりひさ
とるし
なひゆりるりしあさましさる
解 夕暮のそしらて入あるし
あし
わかれやまちらうそもつたたまし

さりとてハ夕霧乃妄貴なりし
とし

さるハさしけなく
秘 文乃さ留し
苑 夕霧乃文の絹とりよし
義 并ぶりさる中りなきし
夕霧 玉し井とつれなき袖よとゝめさそて
我念うらまとりうしかなる
秘 心まゝ涙魂もあくうれて行とや

義 玉しゐをとゝめんとせしハ我心
うつやさてとゝめてすとふそわり
念うくとし
行 あうさわし袖乃中ゆや入ふまん
わつ玉しゐのまさ念他する
義 此哥ニシ関
外ゆはあハとゝ
行 男とすてしいまやしふれんとまま
知るゆはあらハ念すりまわ

秘并 義 閑 用之

昔もきくひけりそめと

閑義ハくらしてよ給われたる 昔もきくひ

けるとし

ねくかこミて涙のこすん

秘 夕暮の心中さうこえうしとし 并

閑 心乃くらさとし

まひの言ひし事する

此稀の浅額めさしろ文りそては

かしとう文比維かるひつ事みみ乃

稀よれかりてけきしくら為は

とふふく能業て つるののみまりいは

きしあちしうるとあふする之し

閑 実みありといふ尺しとたとし為

付事よつけても見たうきき

秘 夕暮の御俗さしの切なしなきと

しくり 并

かて字うへりの心ここえてハ心ありや

秘
いもせのあらし
凡おとりいよいよくそての恩切なと
あてはうすく今よりいの成へし
一蓮蓮華の縁とちの事とさく心ハ
かりの座はまとさし置するもの
なるへし
弁
り急のすき心すくと
あまりえ結ひら
此息所々つひの志し

河さりひとりそ海りて
河
律師それとも説法阿闍梨ハて
いふし
秘
大日如来（ダイニチニョライ）そふそし給ひハ
律師の月嘆し
わく床しいとて給さやしそれとこそさ
よきとつ達する
河
悪霊興盛速纏し
花
そふしいは業障し　河海あらされら

秘 花鳥説下無業隠し
抄にもなく
箋 古注にもなきし
うちやこの大将ハ
秘 古注にもなくふとらひかしなきし
ましかけぬひのなきと
同 定通乃なし
さる事も侍らず
このもとの詞 柏木とまさ中りて

遺言あらしと思へしと給ふ
としまてらむ執をさりてひよお
つしさると
そあるさと
秘 法師の絵え返し
弁 我身はなるへし給ふとし
なれらしハえ見えい
あふらしハ律師の自称するなり
こちいを見分し

いとせちなおつねまゝすゝり(?)

（河）大切なるつねし　弄　秘

（義）句作なき事なといへし

（同）無なるねりとらふし(?)

人ハいときなくてよ物しらす

夕霧をとりむかふとし

こ大宮の御ゆひつきし

（秘）夕霧の祖母北の方　弄

いと高くなし

（義）無益し　いり思事なし　（河）

かんさいたよく

（河）本妻（ホンサイ）

（秘）雲井乃雁し

さる時よりかくなそらへるならい

河説

（秘）それなるいハ　新説し

私説也

えらの君をとし給へし

花
女二字とて

秘弁義

雲井ノ雁の戯洙（なでさ）落葉乃え体し

給ハしとし

女人のわしきみをとらけ

義 女人ハ地獄の使とこそいふ

長恨（チマリヤ）乃ゆミりよもとらわれ

後世の冥闇なるへし

人のれいりしてあるは

秘
おえんしきとのましし 弁

義 嫉妬 好 闘諍とこそ

ゑミうち起ひらすと

何
あらし

義ハ世ねましとし　　心もりうけぬ

よしや 義

いとおやしき事

秘
御息所の御

不審なるよし

心ちのまよひなしるは
君やと命の君てまそうつしうり
しや
大かたいとまなやうに
秘 久勇のよし 昇
人のそしりはうんをいそふみすそ
秘 首略し
昇 くりこ候心又首畧九合ほり
心ゆるされすいあしと

心ゆるさねずとしなまる事はあ
しとうちとけしとも
律師立なるのちは
こやすかのあつく御侍君をまよひて
こひのふし
京さの比さの夫しさ
さりけるさ文の御実りなさき
ともへ
文ものうるの跡のせつな

秘
ありのまゝにみやせうの給ひし事
なり
私ありのまゝにみやせうしといふあるは
しらると見えたり多しあるは
の給へるといひ見えしさるれ御つゝ玉
しゐをとつれなき神乃奇乃
すいりし時のことまへ事なる
つきれせんやりなりしに何
さもしさ又えみをととく危

きとのことまへ見すしかる
おものさまにそ
秘
御息所し
見そてまつるもいとゝくおゝし
秘
か将れ息所のさ後をとうそまうし
きりにはして
義隆子も　つそしきさきや
みやとをすし
とてもあくてを

秘
こやと云の結し事
竹のよこにはなく
鶯は梅のうちとけたる様なる
ものなりかおかすとも
其実の事は人はいひ出さるまし
とし
けさうしまつるし
秘
はなと竹ともしてけさうし
あしらさとし

鶯栖木の事 さへつるはこやすむ宿思
かりしょうし あまたありて甚深
梅にも あるはとうくに いまさら
そてみなんと云ひ出す ものふかき
くにこそしるへし
同
柏木の事とさへ無念なるへし
うすきうし あまたゆる
秘
なものいはすとりは今こそ人にそわ
きとし

うちこへまいりくたされと
義ゐやと所の方へこそ来れと
もとし病中なさへれとていらへし
用意あるへくと見てとり
まいりてたりなん
御使ゐやす所乃あまへゆきつ
のまへとの事ゐありむまてタ
責れなるとそへのなへ答なりとは申さね
とし

ひと人乃流そうと給ひける
(昇)よ人の名称し
このくにもいうに
藤菜れ流名卒し
えたり給ひそ
ゐやと所のたり給ひそし
つきすくて行りしと
(秘)女二宮の流名し
とたり給ひて後よゐく給ひてまう

ちゝねかりしてみゝしまとゝのへて
いりとし
やさしきとりねさ候よし
薬菜の詞このましむつしく候へハ
よりもんとしみとむさとまそうし
くるとあふすゆへし
わしれけ　秘　脚の氣し
あまりとうし
秘　かしかけのいかれなゆへりしかさ

のふなし
秘　女房ハへいこの詞をおのめし
こやと申ちりのまへなよしとせら
義ハへいこいこやと申し　薬菜へ
内ゝ云ゝせよし
まうしをよせて
そうしことくへてけさやうなり
ありくるとし
なけいのまへなきしきとハこゝろしく

次

秘 ミやこも所せき事ありてみなきくの
のかうしとをくうつしもて
なかし弁
藤葉ありみなけり勝てまけ
らしとも
河まはいとえひしくて
秘 女宮の御心
こゝ事まのこあるを

秘 柏木の事ありとつくし給ひ
しし弁
身のあらまほしけなり
笙も柏木の手
このくいうしてもをまて
秘 夕霧し
花 このくいうなりとりて
さらにかうひすくくのとにまりて
花 弁の君のさひうけしまし

秘
夕暮とらひのまてもみいるすゝも
旭とくなすのらてきてはといそく
いせいすくさきのすふとし人のこくは
人さし

箋夕暮よりも下の人様へり又
ゑれのるゝ家にありとすりされ
夕暮のうすとすきしはおそし
うくきむゝかゝるもあれとそれもとろ
くしき事とはおはそし　同

弄
人のとれ人言し　実ありいきりく
さむなとい　実事あるさすと忠く
みえしけるし
私花鳥は弁君とさして心つなも富
やく又弄ノ義もいうく
かくりにて成ぬるたゝき人の
秘
皇女なとれ一人かうにんしてかなすま
しきに付夕暮の事をくいそてきてそし
おほしくして

若し居してやまい若しそし
中乃ねりこあれ戸あけあさせて
秘
閑居よりいろとのまへら
草
中のねりこあ　見苑香法巻　寝夜ゆえ
乃かこそうよ寝ねりまして法ま
やとと見て　烟なるとなく所すら
帳基むすとうすにしてる居の心すら
私わけわいせてとふこあさうれさと
あなよ戸乃あるとあけてさうき

のまのるへし
法ねの法さりしあやまちれ
病中なれとも平生の礼とまさ
らねとし
いとみをうつりしく物れい
秘
ミやなあ所ノ羽
この二日（フツカ）三日（ミカ）かりまそをまつりける
その
江
一日不見　如三月　毛詩

のちゑのつらどもいわんの御ゆくへをみて御こと

秘 来生再會はみなかなしきと

行 親子は一世の契とかれ

一世(ヒトヨ)は二世とひ人ねちくちくとさて

やるかたもあらざりけれかん

義は弁ず引

又めぐりまいらんともおもひやる御ゆくさき

秘 又生れあふとてもまたにあるかなか

危うしとし　弁

あまうち母すゝひ給よけなも

弁 思ふとていとし子をはむまれたんとう

まよひてそ見ねは恋しさ青は色よく

あへこと因

くやし義理もてすん

秘 あまりの危うさてありしも今はく

色しこゝとし

身の後もちとつらしのふかまよ

秘 京の流なまよとしみやと取乃おもひやり

すゝし事

はちすとこそいふなれて
荷葉家の旅陰し
あさこしめさすすと
荷葉は夏合しめて
てはうつまうすひるとし・
こやと雨乃さひすつとひのすゝ風し
ちくは名残のまりしけえしのすそ
秘 こやと雨乃は夜梅の日まかりとし

秘 みしかよと雨のまつしきとし
むすまうしかけのすゝ
荷葉乃はむしの花わくとし
かしこまり又は雲けり・
夕暮まりし
心しらねへしもそうられて
夕まくり荷葉の間乃事も尋ねて
おね君とてはなけりといひて又みゆとひ
しまや

さひしさハ落葉の水たん
人来れおりしよふつ水たゝひて
秘
夕暮の狩人ころよりあしてとこやこと
雨死のうちよいさしか姪子しぬ
てうそまちのすへ子し　因
斧
おりしよつるハこゝ中こ一雨乃色
暮時夕暮死おとし多して姪子
さんとこやと雨乃まちのすへ子とも
粧ふこゝし給へ

秘
水遊事そしのへとし　斧
人乃御名をよここさ海よりひなとすへそ
斧
あふ身しとうき中よりひなとすハ
よここさ海すゝすし
私よこさ海よりひなとれの時ハ右別
ここと上　斧
私時服右別年点よこさ海よりひな
とすへとゆ事あり
そふの人こゝまし
因云庭ごし人庭

心うたくしきやうにまゐらせ候しかれともひとすちに
てれいのしまゐらせ候てそもし光
花
花ハ今春乃文の事しらしくのも
いとゝおもしろくあさましくかりいらせ候
くるしくさえみられ候らしゆへにまゐらせ候へは
絶ハんてそくめてたう光ハ紙し
かしこまりまゐらせ候さ御きけ候みまいらせ候
小ての御息所ともひて光しゝあらく
見すまて

私あいさきあまたまゐらせ候御もらひま
しも流あつかいくあまりて
いうにおもしろくあまたまゐらせ候御ゆかしく
しと流あつかいおとましめてたくまいらせ候
まてその中にもゆかしく思ひし
てにやとてあはれおとりよきたまひ
うつくし
新
流あつかいくいまいらせ
くろしくされと

秘
此れハさとんやと雨へてそまつらせ
あさましきれんのうちと
昇
夕ミヽウノミナノ詞　秘
花
芝ハ夕暮のミ外中の詞し
ひとしかなんも

花ちるさとゝみまけじんのつゝやし
夕暮
せめてよるさくそ見えん山川乃
ふられてのかれをつゝみてをは
秘
夕きりといとひ給ひて御なれハ

あつきあへしとし
昇
夕暮といとひのかとし
義
山川ハあさきあられともせつまてハ
ふくするあしきれとも給うれて乃
かれを流しこそて給ふすハかりてあ
さくハ見えんとし夕暮とせきのき
もかれのあつきとせき給ひハ中ぞて
あさくへの事くとし　雨給なり
まんまのかれとよし流しまんとあり

しかさは心せはくこれは井とけ
あるへし
同
せられ多りとも心へりて花は多かるへしとすり
まけしし男もう花ともうはとよ
くはしみて心せはくこれは井とけ
りくへりて花は多かしとし
紀もおかれと
花
みやもと本はみをここはてけさやうる
ふう文章のまとありあ心ちよありて

こまひもつれうことあさまいしとこひ
のへかし
あさまし章に心ちおかり
同
こゝのみもけさやうるけしここに
もありてあさましけりせそ
けるのやうなる男むきりもなく
又絵んこうすし見てあらかき涙し
きん心ちよかいうるかけしける
絵しとこやを本のおかれし

私心ちよりほいおの言りこれに
とくちとけのえ人むつかしきいは結る
流れもうちて山川のおとさひしらん
まくし理運けらひるる事也
こよひもにほふのさと
秘 みやまて霧乃かゝりて太るさびし
まそてわりけるやことよひもつれ
ゆふさいの音のおとせねし
こうんの君乃流さ海のおもひしる法

物来は女之子心をとりてわりし法の
ゆよすべし
大殿ちうさよせひのこまうん
秘 雲井乃雁すとのせひ給ひん所て
輕いろ乃すみを記しきとくらんと
みやまて霧ら破了さひの聲も輪と見
むとおりしてなちの形しきとさん
てらうり かさのかて
新 みやまて霧の夕音のかたへうさのすて 秘

まかりしけるくなりてそ侍る

秘一 秋夕乃詞

折ふし女郎花乃色も一所乃あたなま

しまずとし 弁

とり乃あとの中てよ

そのうし

弁 女郎花よ死すとすしめのすへし

起承息女 とゝまへし志りて歌へとひろことく

一夜かりの色とゝうりきん

秋乃野よかりそくれねか女郎花

一よかりの色とゝうさすらん

義ば奇ゟ引

義志りて歌へとれ人のそそや

さね所とらへし

秋乃けのゆめきこえ

秘 秋乃夜れまつしゆめてとりへん

とするそとし 弁

多由ものかハ歌さするし

なふさしのかひもなと
秘 あのけにおされて宮ゐとなりのなき
流月のうきまてに
落葉のうき月すれいとくましと
すけきのみて
三条殿におはしける
昇 雲井の雁もあさき
ことしも行かるに
昇 花菊宴すりかきし心とらへ

私ゑし事もきらめかるゑしきりと
をひとまりのみし 色は今参承出へ
乃ゑ着れ事とらひのすゑこし
らへよあおりひきさて
行 河ちよ残なちへふとあり
心りりいらへよ云つとへりいとね
よう意つりとえんりしもゐる
昇 絵用以ゑ
り寄れ寄りまてゆるし

水方ハおしなれけりさその意しさと
雲井ふ恋し　小野　ついまとめのく
しみて
よひなるみ経よそそうのれくち
小野より乃如すし
をれみもこととさ那て
烏のあとれやすなく文　灯下こそ
見かくさし
六条院の言んうしのさへ

秘
花散里し
まてもちとくしの水さ雨や
行
直人のやうの中にゆとうふし
同
平くるの中すとらとひあへしのさ
ひとしうい　引きうなすり
さまかにみともみえてりまへう
夕霧よらひそうじめしまて見
ぢしてまちすべみと
とし月のにふかすきつうし　さは

秘
雲井雁の詞
夕霧のとし月よそへてあるつるかと
れのふれ侍らるひまかりつ夕霧こそ
雲井雁とあるつりのへをし
とうりかくうかりしらちのへうそく
うりて
義夕霧乃とうしくをとそて更あり
まりておかけする氣色よそておりて
雲井雁へたゝりまよひすまへ

いつこれもおちつ入ぬへき
毋れさ海之　何乃るひ给うしうは杏近う
詞なすり色し
於く濤とまうぬおか海乃京ふより
付
日本紀よ溟渤を大うみしあ原は
大海うかりつ分し以よ第九水原抄ニ云
の多れておゆ流よおゆき可勒
人乃いひはさ色んすハいつきこいてと
水庭かくをけしそうはゆき出ぬお

やへおゆいしとや
あはれとおほして車よせさせて
侍臣左近の車をよせて葬送のつぎ
をとをさ入水をと人ふさげせしとや
たかしとをけちらし作り給ひけるとと
これありしぬるさとをきみにれなるをまうし
上曰黄帝不死今有冢何也或曰黄帝
已仙上天群臣葬其衣冠　史記
葬衣衾事

舊事本紀第五饒速日尊稟天神御
祖詔乘天磐船而天降既神損去坐天
高皇産霊尊以為哀臣即使飄命以命
將上於天上処其神屍骸於天上歛竟矣饒
速日尊以夢教於妻御炊屋姫云汝子如
吾形見物即天璽瑞宝亦天羽弓羽々矢
復神衣帯手貫三物葬歛於登美白
庭以此為墓々者也　略記
日本紀第七時日本武尊化白鳥従陵出

指倭国而飛之群臣等因以開其棺櫬而
見之明衣空留屍骨無之然遂高翔上
天徒葬衣冠衣衾を葬らるゝ起源
然乃ち子ぬ大とこそれかおられ何さり
(弁)浮舟のめおとこの大事や (義)
ゆしこゝろうき
(義)もし浮舟の様生なりしやうに
為いかりごとかな
宇治よりのぼりたる人門舎人左近大

史記之弁　義
(花)左近大夫之蓋れたる舎人之
(義)内舎人員数ハ本元三百人ほとゝ何
ならむと云し
流れくる也事ハ夜よゝとのよし
(義)大夫内舎人なるのいふ殿ハ蓋之
法師のかきりしてやみす
(弁)室八洛烟の古事制りまれを酒と人
こそなきさを死人おくりしまて葬る例

いともかしこき事多かりけるハさてぬ
よそつ殿の姻族之人なるに此姻はとさら
ふさられるへし
の中人とも八中にしかるなる事
常陸介はけうかり拘ともは常東人なる
かゝかくゝ之　又宇治の巻光人の　以よすそく
まい乃さほりなしある事より
元　入棺拾骨なとやりれなし
かく人おそふする人ハいとけふかく也

元　父母氏中にらさ親ある人ハ東氏人乃なら
ひくとより何へてさ後乃事をさるよ待
人よりひさるすゑ之　弁
秘　花鳥かくおやある人もありけるかくと
兄弟ある縁なるへし
大将殿もこのたにもなるせるへりさ
秘　人乃とりたてらうるもひ有へしとや　義
あはれなるひまて
並白はをさき枕りなれハ志りしもう白

の浮世をくしの色のかたち薫風から
ひ候ハやうてかつ礼あつていかにあらう
うとけよし薫のうとうりし芳さんちと
いさ候てれ此とくせはけらく
浮世れ衆生の果報は絶へりしつなき
浮世流さるき疑をはひ候ふ人事ちと
いゐらぬ

きしきを見ふこて残りまは名ゐあめ
念ぬとりとうしそちの御されよかとくし

都うらみは叩うく光をとらせ
みえしき御をもきこえてん
薫之も事のさ御をとろうふハやとん
ゑしきけめぬつき事
（花）蓮れこくのひて我身をもとかち候
りくれりしさハ次ふなきん心ちより
（妙）悲しさとしけむかすいてきさてりや
古乃人かさ見そかく仏れ女をひとつえて
（美）をぬ隠しいかうとれ人弟れハ薫をきれ

うらみ給ふまし
入道の宮の御方ゝ給まうて薫山よりはるかに隔て
秘 女三宮
箋 女三宮のいおりは薫の御山よりはるかにとを
かるを経女こもこもりますや
弁 女三宮はなやしけるに薫も同しく来
説なるへし
いさゝかさきは宇治川なり
箋 ちかゆく宇治へ不通なりし存知し

なくなりて
清はらひのあさきをうしなせし
箋 宇治とはこれはその事よ薫の院使の
なよをも紐ものしく出つと
その文の日まても清とあけて
浮舟のらせ給ふ又この日をこまりなり
いまあり
いまは院事はきこしにけり
秘 薫より御使のいまて

筆 咲ましにうつりおはしまされしとぞ
かゝる事に日をゑらみ給ふ
石山参籠するゝ
よ魚の事ハ
秘 葬送せし作法
さうかはりさ侍り
筆 冠礼 元服事 婚礼 嫁娶事 大葬 葬送
礼記に出せる此三乃礼人間乃一生乃
大事乃作法之あるに聊尓なるれ

作法をいくとめまく
されともあさとかしこく
筆 薫乃御為と何きゝる之
大乗大概にして
秘 仲信之
あらこみ華れしさるをとかとゞめて
さるさ衣乃あさきもしに陰なむせひ 詠み
こえいひ身のぬさ頃りありて申すやかと
はうこ作帯く

敵はいつこあるまじく

秘 薫乃外にもこゝに宇治乃里人かう

見しきとや

おもふにあらそちれまて

白宮の塞通のまし

ゆくりなく

塗

蒙 物乃懈怠あわそのやうなぬ様事之

なやませまあそりふ

秘 女三宮乃まつひまあさこのまふかくかきと

あまは之 蒙

私女三宮 石山よりこそりかまたてゆ

宮乃御こゝにもまいさりにたえれ

秘 女二宮乃御うへこと 蒙 并

としさほともと紛れゆき 註と

浮舟乃事之おもくしくおへきかの

あまにてりけしまし

いまくしうてあんとて

義 夫人〃かくて年月ぬれと薫ハ〃なを
あはれさ深かりしといへりけるなき
義 浮舟の事をおもふ薫の心也
かゝる事ありしかとあり
義 女君のかたの心也　大将や此浮舟ハあはせ
さ深うに思ひたまへり　中の君の
秘 古きにまさりしかは事也
思ひのありけんかなしい人にて
弁 よれつねの人まは思ひ見給ふてひかれん

うせたまひしや
義 御なをかへらひをうせてなれは御経読み
るをゆへに仏の御心に侍りてうらなや
今薫ハ我おもひしか也
秘 御仏のよの方便ハ慈悲をとかくして
顔をとかくして　仏の方便にてかくれ
こあり 義
仏の前に顔の色をたかくをれつゝ思
さらしつとの事しさやうなりてんにて

乃仏の方便にて慈悲をもかくしては
其人かとしとらしなひて親とまうした
御の慈悲にはあしぬやうされしゐを
ましく先ん方便にやうへ
かれ是らく御ゆして二方（ふたかた）ハ
花 花ハ白菊乃まけきのまをいたり 美
人ゟは身やかやまひ乃をのれし
白菊は身はねの御病乃をのさは
まいひかしまし

いや先以ましこさ
美 白乃浪ららなりさ深さ
いかの事にりく奉りしかひ
誰ゆへみかし物おふをりあらし実ハ御病
あしぬすをまりてはんをあまし
かの殿もゆとへし
菫や
美 よ打みかよりしれとにハ
文いりまてはあらし実ハまあましまて

薫乃推量之

さそしぬへき

筆 匂の宮みかかる人々と浮舟の事を薫の

おぼして

あやしむ様もこそしさむら

筆 薫の外え匂の事ゆゑに浮舟のあはれ

のをもらしさぶらふべし

宮のれとよりひよ

筆 匂宮のあやませのよ事

としころはあらぬ昔ひみまをとゝめて

朱 さらんと　私浮舟の事もさてみすて
うしなふあられたく

秘 匂のれよりひちを薫の御子の浴をとい

かくとく

式部卿宮とさしゆかとらせ給ふ逢は御

おちかのみてうをひなうし公のみふ

あはれよ思ひなるるれて

花 しけの式部卿の系図よりあり相違の

御門の中子などは…大将のおちかあ

松
さりとて蛙腹きこえて　弁
八宮乃兄し源氏兄弟しまれたまふ武君
宮し薫君よ見てさり薫の男とかまし
ゐもしれ乃おもひのあきらかれ此師服なる
生さぬ中さ渚をときさ生ある物語乃つ
またさ渚抑誇し古き物語兼ね　義
弁
宮も書りて乃こハあきぬ
真実乃遠例よてハおもしるせ
見て語りんもおいなく

義
白氏の兜よ薫之ハまことしくまかりとし
おもうし乳母ちまと納まらぬを
松
させる病よおもひまゐらせ
ららふと宮よふと
内ハ今上宮ハ明石中宮之
なしのあひまきらりしなふともあまた涙や
およそまちり涙かりおつまは
涙痕ハ不学君恩断　拭却千行更万行
かなり涙しをいそクれえむ

峯
白き仏之浮舟の事をよく聞くと聞えて
仏の給ひしかと

松
今めいしくも仏よはきとや
やめかるゝ女しくしくの寺

花
詞上もとみえすとあり
又日よ立仏之

さりやうしたれ事をあてし

花
若より八葉の花のよまし

松
葉の仏之
私葉ハいやさて浮舟の事を仏給ひける之
我をいへみをうしと

峯
蓮の心
私旬の仏は月は葉をを仏中にもよろしく
より捨しきあとえ
おの光ハなかしさハ志れおもうをと

花
こまよりハ白まれ出のよ仏之

峯
志ま八葉之白乃事の浮れなかは
しとも兄ゝれあるせ
きよれくともとろうなすると

松
白くての仏之

義 宮の心 薫ハ宮乃事也 浮舟のあま
乃さわくを宮の御ハ志り給て大かた
ならんと思召てあはれなる
うしとふ多れなさまさるに

河 可恰病鵲半夜驚人薄媚狂雞三更
唱曉 遊仙窟

とし心とえならんに
薫乃心ハ宮乃浮舟の事をきゝて思ひて
推量志るらんハいかにとおほしつるね

はきゝても薫のさりをあさきをとらしやま
しくも心にてとあるを
物のあはれもしらぬ人にもあはれ

義 薫ハ世のつねならぬ物の心とこそしり給へる
人のかくなきをさりあるをとらしくも心
あてこそおほえ之 宮乃あけきを浮舟之
こ心ありハ心よりしも思ひしおほえ
まれなし雅ハ何くまふり

河 まさもこゝろえてはあさる薫本権ならん

秘
川やしや柳かりしとは
川奇（河ニアリ）浮舟のことには薫かとの
人ハ思ましきこと也
花
句意の外に浮きたるにたくさみと見えく
かりの大ねを浮舟君のこととまと
みよく　奇
義
是ハ薫をたのみへよりて浮舟の心かりを
おもひこそ中より出る川あさら
見え所なり

歌しくよみおくさき
世のの物語なるへし　前は此よりは
幸成へし
いとこ先てしもハあるしと
薫のうさ舟のはまるなるよかく
しいひたんとえ
むしり外ニ出りしを出でて
奇
薫の翻句宮との中の事也　義
いまハ中くの人らしくなりまて終り

一 花
弄業の事されて　りまふしむかし
位多くなれく身をもしめて人まとて細し
かりあくる事をいふ也
義 大ゐなとのちとくしれをいへり
秘 業の初苦より心急てゆるとなき
よらしくは業の昇進なくしなりぬれ
わりめの事をこりうい給り
傍してれいまなならさ海まて
白乃ことをいへり

己乃弁れとふ々のこくなくては
流宿主なとのなるて八事のあさきな
り跡をなる之
むりしれらんせし山ゆえに
秘 先より家給の事をいひ出しなるま
義 中業々かしひ経ひし時のるまし
あうなくこゑりせ給ふし人
大業の事や
おれしゆうりなる人

葉 大君乃ゆかりの浮舟の事をれおもふ
おほしぬ所あり
是法外の河へ宮をいれり
人のそしりをも給ぬ色ありけり
松 女二宮を語りし時ふしや　葉
この林や所よ
又ひまもなくして日ころをおもひおもひも
ここにけりや
松 白氏きく耳をいそり

葉 浮舟の薫一人をおもはむやうにみハなかりき
きのふや今日人あるまでの親し
風人しれくめくしらさるらは
松 浮舟の比なき憂さをしのびて人にさへなさ
こさ人くされもすてられぬ世をしらぬ
ゐしもや
弄 浮舟のこゝのりしさまをしなさいふのめ
風うよおもしくせうけさぬ折るぬ人
なれくもゝらるをしなをしてゐる　葉

こゝろしめを思しと仰られて今はなき
御まくら
家 ら色八寸を及ひまへんてしはや此下
まはらくれぬ表もあんしねつりの親
いとかりは見てさてまつりし也
薫の花ほのふかけてと見えんてこそ
まつりしと花ひしらとも清ちのまた
ほまさるとて 白丸事をまつて親ね
よしを見てさてまつるんとある

あしむれいけりえみりふかふかを
菊の昨年にあるらやよりきちるすや
いとあらま道なる事にしり
秘 菊乃親
私菊の色しるし清きあさしかふまでおい
まてひさや
家 いまよとときこゆ色く
菊のさかりひさへりしさと後宗
らしなれてうちるしりしや

さりかたきみてもゆるしきこえさせはやと
秘 薫の領之句みなら世ちよりおもひいりしこと
又浮舟の事ハかくれなきことゝし
をおほしさためやらん
弄 浮舟をも宮もゆるしきこえ給ひさみるぬ
まよひし葉之 義
宮よりも文ありよつきし稀く
秘 中君のかたに居之 弄
義 二条院より浮舟のかよひし事

そこなかりし世の事ともさえおもひ出て浮舟
共に何くれと
義 猶不例の時はむさとしくるしう世をのかれ
おもての御耳共にそうし事ありしよハあ
ここちもかたくなしきことの事にはいなは
浮舟の事なとさのみ思ひあまり侍るも
原りよ共わひていふ頌之
いつしかと共ほしおもひけらるれ
花 花ハ薫の事なるへし
白雲のゆかりもの也

秘
薫の名は白氏の手けさきのまさ也
ゆゑにめでたき人のごとく世
异
浮舟の事八宮の御子なれはかくいふ也
私一生くちをしき身のはてもし人これと
薫匂宮ふたりにあひと思ふもの事をとゞまさ
秘
宿世とはいへる薫の名也
そしいまの世に
当代みかと后おもして白氏を清難也
のするをいふ

見る人までも我乃ゑんあはれ
秘
浮舟はめでたき宿世よき大君中君などと
をさきてこれよ名をとゞめまいらせ
あれ人を世はをゆかり
浮舟の事也
これもかくりまて時のこゝろの出むと見と
ゆらそてまつる
秘
薫の宿世も世の乃あかりかくなれし
おりよそそも

この人のらうたく

筆 浮舟をいふ也

人はいさゝよはつかしけれとなさけあり

河 人非木石皆有情

不如不遇傾城色　白氏文集

心非木石豈忘深恩　遊仙窟

仁王経曰初一念識異木石生得善生

得悪

伊勢物語むかし男ありけり女をとかく

いふ事月日へてけり　石木にあらねは

心くるしとや思ひけん

筆 人非木石皆有情といふハ李夫人のうせ

楽天乃作れる詩也漢武帝乃李夫人をとき給

ゆへをいふなりあはれのかたち給さまを

めは木石にあらぬゆへ家へしておもへ

のちれたてゝめかさとはとそれ

秘 華道乃聊尔なるをいふ　筆

宮たへとはいつこさしまうすん

義 句題之
はれなるをしゝくるかりありハ事と
花 すゝかゝある人も染るりのなときるおさい
のちある後のときをとしよきてる事に
いひけるを人告るる之
義
弁 兄弟のある人あまたハもしくしく葬儀
かとをとせさるりとこいこそそるる俗之
秘 母ある父順ちの人なまは世俗の事
といふ事之

おりこととりし給ひしも
何 長歌
花 三十一日の揮よみうる事之おかしは
無但之
いきしいきてきもちか色らんを
花 行しゆきての化之
松長はしをといひし又三ヶ色のまゝ世之
となして流しまてぬ之宇流之人の事之
月のちてきまるるるるまりし

秘
四月になりてゝ浮舟を京へ出さんとせしかとも
そのあひしは之浮舟ハ薫の方へよりとて
心事ハ卯月十日に定られぬなり
まへにみけり

弄
四月になりてゝうきゝ舟の方をとかけり
三月下旬なりしにされて三月廿日の比に匂宮
の京へむかへ給ひしの給しものをとさゟ
京へし浮舟をて二大将殿ハ卯月十日になん定
給へ給きゝ白山ゟやまて日はおよしぬる比

しのひ給へ又十日あまりをもおなしの家
あまり廿日のよみなられしと京ハその東か
なられむと匂宮三月廿日の御なりき
く月立て此事ゟやう思えて小はしの
ぬなりよ四月とまことて日時成しに
まこらましとてそのことは日の夕まいさこ
物あはれなり

河
日もと夕くれいとものあはれまさりけりト有川
かの哀日もと夕くれまさりけるハうちそへく

人はさびしき
松日の夕くれ之此哥川よをよまれ
故人ちらさきみちきれ
菱 五月まつ之ししとあり
弄 四月とあり
私 さての詞はおもあまつといへるの日
時の歌まへるなみ
全にかよりし
河 なけき人の全よふかなくほくしれ我かく

すみし帰りて法をきみん
菱 なけき人のしらまて神のしあくとし 百十六
こきぬれのやにさてみまより結日みすれれく
秘 二条院より南家おりしまれ時方なれ之 其
弄 薫れ三条より二条院の南家れそへ之
さてみまくまき結日とは宮れ六条院まも
円みとは神よもを結よまへ之
私 小れ宮とは三条家より二条院ハ小よ
あきれしいひあり

蕉
思ひ知や身をなくさんとひとりきさまそ哉
おきよおきろかよそく
松
ほれぬめしふる所之
義
郭公をまそてなるねさまて懐旧をとは
し桂海をとふる地之それ故をきく人ハ
もまてく日毎に海をのよわしほとなり
浮舟の事をとくていまゝに
河
いくそくれ思をはくまとの郭公まそてねさ
思さを知かしよよ時々は冥途より来

ふする之身て農耕をとくむる之道時不越
とれく御まそてれ免おきさをよるとあゐ之
万葉よはりと名おくあり 我なと今は之文字之へ
元
ふつゝるまでも人里
まそての山ちてなめにさうらんなまくきれ雲し
こさ人乃ミ色かくゝおもし 伊坊
みさ取ちらのあまね
松
仲見かし白髪をせ
きしれおのみつもも

美
是ハ浮舟の事をとりとめらるゝ故也
左右
まちかれ物かたりさまハ時雨ちうのして候
なく思ひまと存候
松
かりのあさかほしとおもひてあまりの哥にこそぬ
そも末をハ知して分へきにせ
弄
薫乃哥ハ小白家をかこちぬる心わさ
礼て此世哥に知して候時之の思ひ候て
あさかりの浮舟の事をまつ語給ひ候ぬ
ハ時雨を知して時雨しからぬる人

あまりの心え
美
まるで心をまて公家へまゐりしてせうあふ
事をいふ見ゆる
美
女房こそ此事乃なきしれハみ家にしてよ語ぬ事も
中君の浮舟のあとを排帝しふまえ
ちかれさまれさぬくしまつ事て
弄
八宮の有様こそやとこれの事
此浮舟の事をとくゝとめおかせ
まれひとりわさとらつねく

弁
姉宮の御かくれ又浮舟もかくこそとうき
給ひし小中君のひとりのこりたまふや　薫
宮もさこそおもさるらし
浮舟の事を何ゆゑ中君へかたりたまひし
すこしハとかくおもひとし給ひし
さりとはさる事よかりしものをや
薫
なくしのひしかはかりなりし
中君乃何をかうけたまひし
とく人かりハいかなしく

松
兄君とい（へ）り
薫
中君をゆかりとし何ことのうへのゆゑ
おもしろくうき世かしく
花
六君乃ゆかりこそては人まことうきささま
とおもへさしをみわたし
松
六条院の御ませはかりかなしく
ここそあはれひとへハおもしろくなれや
ゆかし
ちくらしせうしとみ若菜

夕霧や又六君に兄君乃事をしらず
あふいとかやとて
二条院中君にうつるを
いと哀乃さかに
浮舟に中宮の紀を
まいり人しめしこかの
大君の大夫 時方なるを
私大内記式部大輔 道定 出雲権守
清つ大夫 時方 此二人あるべし

大道をせき人は浮かひは
宇治へ大道を運ふ負りあるを
母君はと浮かふこの水の音
浮舟の母川のきしきをゆるを浮く
二かの宮人ゆゑりあるを
いかきこえて
匂乃浮橋へ
おもしくにたる立あらしこれ人
こゝとしみえるをきを

義
浮舟にたとへ旅に妻流もさなかか
なりけり
かよりのきゆしと筆一筆てまいれ
大道ならず然らずに句の内そ来い
何ともりしの年人年の事とも
出来る也
何かやしれ事を思ひしあらしえる
しく
時分など似りしよりなさる當風様
しあるなは難人もぬ事しゑとや

弁
後人こそて何もしき海をえへしみとし
まことそひて色はよかぬ也
白露は住よきまする人の難也
再ふれもあひし

義
梅の小路乃時の事也
しれ能りせて此流のひふなん
時分大綱大道にきりまへしの恨みとや
いまはしふ人てあやしと

義
花ちる郷

物あはれし人にいひあはせむと

義
物まかりにかこつけんかや

ダイフ
大夫もあさき二也

秘
時鳥　花ちる里之　義

橘の花をとめて行つきを

秘
白乃なかをさかとあつかひ給とのこりよ

事なれハ此歌ふハ右近なとしみハいり来

久しく絶しをとあるへきかりしせす

みなむかしくおほえしうひかしうや

いまよりは私乃絶しとゆく成之

しとえ

其うちをとも何かは

弁
白氏乃御詞之　女房達をとも此歌よみハ

つかうまつる人ニさ事やとも是しかいか

こそてとさやうみたとこさあしさりしかや　義

もとくしの心はしも中しくあさき絶さる二也

弁
字母あしく成かひて後ハ中しく絶しと

ゆくゑひきあはんとや申し御綱ハ淳
母れおハせしほとはまさ乃車之
流のミはとゐらして御りせしふかく
然のひこの後ハ中らし一まちふ替ひさ
志るゝとや
わきし御車かと
秘
北方の綱之
いひこころまでとこと
侍従のすし之

ゆくまいりまへしい色ふ
右近の侍従よさしハ年のまへしいふ之
まして何すそのこさましさせん
侍従の綱　秘
右近さくとらん御しおしもいてくまし
て侍従ハ之之
御いみれほしふはいそての
禅中みはいそての年のんとや
あやませまし御別きに

桜
時分の則之
いとゝいへさせまよりしれ
句文几比物ありひ入て揮りはへぬ
流さぬうしや
ありし世浮みをとこりは
筆
浮舟九ちまち苦脈も揚わさく花ひらよ
かとの流氣色うしや
筆
あすし流さぬもいと悲しう
句の流のさぬも得作の花よ見や

らうきこちぬしとも
筆
得作の浮舟の脈をとこちうる之
去はぬいまよれるとゝなる人をみわ八
筆
作の色人あいせぬゆへみ去をとうらす
なくて脈の色ぬとなさぬるされいらと
足なりをとりうせちまり
桜
浮舟みてなまのまは作の色人をなか
りまいへ去八苦脈のましみてあるゝ之 義
筆
うと色ハ苦脈の時九うまて紫なりくし

おほせありしハきのふにて
侍従か館之浮舟の物語して出よとの物
そもや 義
人あまたをかよはせ
侍従か思ふ人かよはせしませ
文ハこれへまいりても
見えこの人は侍従や
義 女房のみはゆかりうらみてあれハ
中将殿の身ハ侍従か文

その東なき給しさ候
弁 こさめをとかふたもしほてまた出へし
時の事しや
義 身をとまりしよのすや
私自のたりして侍従かよあひて候
のあひしそのまへの経事義経
九條のきさ候まおはしそらん
義 かやうの身もとなきを給ふ人とはいひも
よろきなしとの平生の仏法のをいり

咲しゐしうきの花さかせてもこ人もおま
しかりを
おもひしれてそひの露それからも袖く
めかすハよれつ猿なの花しいそて才とをか
きむことはそひよ主なかうこ以
古れもとろまてせきとあたらん
善 浮舟乃月をとなけつる聲をとろまてとり
とあくらく以てあらんもとに何なすれ
やうみ白氏其をもえ

清みを庵さうしおひ結ひしなきに
昌 此宇のあさ由をと御経の文よみかくりゆ
きかうし此調まてみえしまり
善 舟なしうしなひなひし・より舟のさし
ふかと後梅をのこ
何くりの梅しもゆらんせきかりし今乃
傍經ゆゑ
あらくこもまてなみの庵しやいと
紹 中井もく所ふ行なりまとこ
善

けふりんよつまてを知めしられかりんを
中幕よろまてゑるはつるしおもかるへし
かれかれまとしめて
松 浮舟の料之
くれのここちしてもひきるをは二一よあひ
河 掃苔一冊　衣箱
さしきれ人よみおもせたる
松 おもせたるハ此人よ似合たるへし　筆者
義 わけせたるは課ノ字之こし似合たるとそ

こまかにいはよ絶へしく
松 くれのここちかるへし
かくなれたくて小
松 流眼の時ふかき八ときてまかり給へし
大わ殊も桃いとおもつりかささみ
義 薫の字作へおりしたるへし
志のちくみこの流れたるに
義 八条の時薫おりしそめしるへし
御をとらへまて

義
ちく葉をおりしそめしは仏在世の
むかしあれむつひろりし迦葉ちかひけれ
くらひてより仏の内伝よりひろまく
たれゆく物を学識くしたの葉乃色之
義
あはさ海もちろくちりもきらん
大道をめしいさく葉のちの朝之
けまちかとももきし現なく
秘
弁乃心せ
義
弁もほのくちりさ事たれハ南座

ささりしてこそかくれあらしとかさ
海事ともとりし之大道の仏図之
あやしきことのさちにりそらことを
秘
白乃けれあありそりちてとともそ之
まあやるの法きしれふさしむなひ
秘
葉の実ハ名人ちの小むかひちの事し
義
実しこさ葉小むかひてはるてちさ
こかやしめといくまのなとく
あらしさ海乃こと

等 白乃事ニし身をあけし事ハ
「何さゆしう哉しきね
秘 入水乃事
我前ハ何もしさ海乃まとは身をなきを
しまし文色ハましとも中なる事ハ生ある
かくふかしと
秘 薫ハ不審にといひの庭あ之
おもしろく しき事はあるへき
等 浮舟ハ入水の事とはあるを流まりまて薫

のあるも之 さまハ此人ハ色とあハせて
白雪ふるものあり之しあるもこもそれ
まても かくあひ歎さ そほのあるし文
その人くハ歎く さ海も さハ見てぬとせ
流まゆし流れり
花 寺ぬのかあつ処
流とりふくしてしせうの人やあつし
等 浮舟と一度ようせうの人やあつしうま
をおもうさくかりしくて我大近くしせひ

多之薫丸綱

我をとつかなりも

（義）薫丸をとりあつかふとは浮舟丸出りしをや

さりとさりし語之

身をとんあけ語りしと人のきりしは

うらかりしくて枕として式部之綱之

よれ翁んえんんを俺しか

（義）人の子と俳人とはやゝあしと右近をとか

心をけらまて翁をとうり語之

さまはよしあつりしくて

（秘）右近か作之

そのつゝきこうしめしまむ

右近の綱之

おほとき俺あしておもひいてまへりし

八変化字流にて生むしむ子色くさ（成）

人乃けつまの方へなり語し幸手とて之

世らあしけりの流とま并

此字流の筆之

かくまておりしまれをと
（義）薫のうちのやうすを云
ましもあれ浮舟のおもかけさとゝらし
（秘）薫よ何するをもなしさし給しも
也乃ちのあつかさぬせて
（義）三条宮へ薫はさきさんとしるしまも
よたいてくハの給の孫と
浮舟也常よう思しくもしるも
その流かいかなよへこさ

（秘）東人出しなよへこさなし
（秘）流くも山をとかうして也ゆきさるゝ
母れよし常陸の妻なるまゝとも
（河）浮舟母れよし常陸外の妻なれハ南
国乃名可と云也
也なのせさうこ
（秘）彼こ西の流ともあすまとれ前のましよし
（義）大将の親
（花）薫大将并添こ西の流ともあすをとし

たれせうとこそと也

久しくれきうそこかしこも御さまよ

〔箋〕蓬のさしおきて高つまきまりせ

おのはつひのまもてなれ中にしつるすれ

〔箋〕蓬ハ蓬の義注のやうなるを浮雲など

まひしきぬと大とかいふ也

〔秘〕いかなる年にかしぬきれつる心さしせく

蓬の事也

〔弄〕白宮のまうしを祈さして書かひ思なき也

心まかせとまつせなと

蓬の鋼河に川寺のり不成之

げせうしみつさ御ふ

〔秘〕物(ト)擬(キ)なるさまよみしのぶまで

〔私〕見諸ぬさしあしいぬ也て

〔箋〕挟也

私云取せさしみしいふなれ

とうれにあしはきんまう

さては我をとろふなれしうまる

弁
浮舟をとゝむる方なきや薫をとも
さらに舟まさりきんとや
箋
薫乃称人よろつを浮舟のなくしらき
かしハ割れありしゆくうとや
いまはうく舟よいまうしと
秘
薫の須之
箋
あさ人のゝ色ハ心人ハいとく事もとも之
宮乃御事よ
箋
匂乃密通承之

人乃をとまりしまよ
匂宮は人のをとゝくらりを宮うとや
比ねふおひく舟そまつぬあけさに
箋
浮舟乃匂人をとらりして称もおひ
こねおそひよ身をうしなへりとそ
薫の事之
舟うたにうはさく経てまれ
右近の之
此を思ひさ事まきこしめまうにより

右近か詞さまことにはふくしくる旅之
をかしうおこし給しきん
（秘）
右近か詞之
右乃大臣の御かた
（箋）
中君之二条院よ浮舟かくし給ふや
入おはしましぬるし
匂乃二条院にて浮舟を見給ひし事
（秘）
あやしく作し取には
東屋之巻之

（箋）
三条よりの家之
角二乃きは作し玖りりき
（花）
正月小卯杖卯槌など中君に浮舟の文之
宇治よりまいらせ給しを匂の宮御覧
おしりのへき
一つはひや
（箋）
無きます之右近の国にありて中宮
こ浮舟はやすしありしと右近なとら
そみして一二字をつゝ

かりそいゑりし
筆 菫の心もれなかりけりいゑ屋うちて河
らしとや
宮をとめつらしく河されと
見しり菫乃年ふさ函しおもひけく
まのよるや
筆 まゐ方をけもしにあるたい
菫の方をともあろうちも書なれ
く身をはもてけめるこ

いろそかうす苦ととも りとめ出もうと
河 世中乃うきさひとに身をとなりまは
うつさ苦しう河さしなりあるあ 筆
松 朝かしにも函く入水るゝの花ひりは
あらもりまうこ
舟 かく函山里の川くさ折なりしはおもひ
よのまとも函りありしあとしや
さけもの名をも函もこしまうしこさ
宇治の里の名之 大光 以下乃すまんと

はくもや
人ことはきりなくなりし
秘 かのふなりけれおほえまさるゝ　義　花
まことにあやまちありて
義 此浮舟をハ我すてゝうしなひたるかと薫も
こりうる身をせめてなし
そのれかなひたるほとにて
秘 葬送なとらしくせしと薫
此事をさしてとなしと思ふのよ

はたらけ人の子にては
母なれはあふ浮舟は色ふかりしをおもひやうせ
思ひとけとはかなりしも見えさてまゝ
秘 句の事なをしハくりしくハ母はさかまりしと
まのゆりよいかなりけれ
義 女二宮の流れおもさかりの盛事なれん
と母なれゝ思召しと薫の折節を
まことひとはことにはなまりおれと
現在此所まことしうはせぬ人すれはとさまにとも

人のうきよにまよひのはらゝやしめし
わしのみ之
流くる泡れきえらむと見えしこめ
車擱之
菩之 まてし又られなくてとあまくてはかなれやと
のこまれ法をきえらむ
義 菩乃こゑき之此事れらけまはらとし
くるゝんや法まハ飛ゟきこそとまてゝあゝも
阿ら人と之

阿さと今はましかりまゐり
義 前の阿闍梨の律師よなりけらゝ之
津こいてぬくわり
秘 入水ハ自害のうちおれ之
義 殺生の准擬之
如溺水之人急須偏救岸上之人何用
済為 観経玄義
又自殺者殺生之随一也
あきらけし 浮舟殺生なりくそや
阿まれよせりくこ

箋 弁たに蓮花をもつ事あるか
称し見月とのしうけ給はしく
河 世をいとひまのりしこそに立まて
うつふしもあれあさりさあき
箋 弁の在すし誠に嗣もあるまきは
出こぬとそとそりや
あまりうくむの色まて
箋 蓮花は字常之
いつまれうこのうつせに海しまにまん
河 かさの物語にあまそこし 水原抄にも有

花 なむ物しお流へうつせ貝なといふあり
うつせとハうつせ貝之八雲御抄にも深
をひさきへるも河海にハうつせハなし
き流しかれもあり歌もあり
弁 うつせ貝なきにも見え 万葉并古川の
貝よましまて
秘 河海流いふうつせハうつせ貝なるへし 箋
箋 うれ母光ハ宗なこうむつき
常陸の女かねの歌之

まいの家にとえいへす
弁
けうとうとて常陸の家にもゆかし
人なれもいつなんとせ
薫
浮舟の事よう人にしそうし
猶しまてえうれ
弁
いましましきなかれハよろしくおもふと
えようぬとぞ　薫
のちまれ人くのうちにもとし
浮舟一人のすゆく金の子の上をハ思ひねと

大将殿より常陸法なひ
薫
薫より浮舟の母へ始めて文つかハされ
あさゆふしの事ハまゐりきこえんとし
秘
薫乃みの詞
薫
此事ハ母の方へ文いふしなさるゆへや
まいていつものみおしみ
河
人のおやの心ハやみにあらねとも
子をおもふみちにまよひぬるかな
薫の母乃もとへ案内しての返事
これしなきりは

秘 あひかりし渡りかよりしまへとせ

義 浮舟ことを薫を数ふ世之

かれたちの女なり

義 大君女御仲信之弁

九乃ちかにかの川をおひて

秘 口まもし此使なとの給ふ歟之

義 薫乃常陸介かしる也之浮舟之（こと也）

此切ありし中将は母の北方まりし後之元

今かうりと清をと見給之（こゝなきり）

しと使しして此様之

おさなきさ人（こともく）

義 常陸介か子ともと之

秘 蔵浮橋まてよ小野之使まつりける

ちかりもさ内之

いかくしとことむまもしこさ云

義 様かと甲し雨丁ありまれハ猶かくる

ましこさ様うと之

秘 持使とよひありらう之

いかし此事にふれ給はぬ
秘
母乃いさめすゑ
子にふかき世事え給へ身まかり
なかれ涙なくともみる色こさしとも
命のつゆなかれしかるを
みやこなん
筆
此君にはなんしかきこえ御親おもし
秘
こしものは色ほりなれさ海を
宇治にまてくとかれしまた

かたなしぬ身れをここなきに
母れ数なしぬ世へ座にもみゆ秘力
乃らうらとや
秘
なみしあなされひともとを
東へさしてんとや
里れちさりともいと似かし
む
光も里乃名ならぬしふ仏之
さぬしふられれ
母れ事し文子しとれまなし給れなき

なれしきまでさせ給ふ御心たにとそ思ひ給ふ
らるまてそ
義 薫の思ふよ給ふ所なるまてはよしとて浮
舟の事よは心よくもなくさりしと也
かはかりなそてまつらんと
秘 浮舟よまいらせ二の大将殿へまいらんと
心さしの事也
弄 帯もと浮舟のありかたてまつらんとし給ふせ
也又薫之へまいらすよはあるまじき也

はんさいのおひ
河 班犀帯
秘 班犀之花あることみえたり 弄
班犀帯四位五位乃人常に用之 公卿
服あるは鳥犀帯源園には班犀をさし 細
いともろこしのまつさいにもこそ
秘 口いしとは色ろ乃をとりあれは無益也
義 薫の御事也
扨もかれ人の心さしは浮舟の事せ

こゝはひめ君のことにて
浮舟の母の仲信にあはれし
なりゆくなとハ
うきこゝろのゆかりもしらさんハつきたる
あらしおりてもさるさまはあそひなとも
見しきんとや
まつりせ給ひしこと
秘 家礼ゆきさまくしとて
案 母の親もとれ使のゆく

常にとなり事あさきゆかりもあひ
案 在陸よもあひなんハ人のけしきひか
さんとれまてさまとをもれまてハあるかぬ
事うしなく見えしておもと薫の
似たさまへいひめくまうき
常陸の子持しあさむは人さもけさ
薫の思ひ給ひかうつる様子
みなにしさうれ人のむとあ
秘 浮舟の事ハ常陸介の女ともあたりも

有人こさめて

峯 みしおもんと常陸ほとの不死物の女よ

こやけの見たまはれ羅老たりとおもんと

なりられしそひおしめて

年人そこはやしさ女

河 九代タヘフト　日本紀

かれちのむとあ

峯 浮舟を実ハよ常陸の女おりきてと每

しらぬまくましで八宮乃御せ拝ルい

かくいふなり

れこれゆゆりまり

峯 浮舟を薫のとそらしおひそのこ哉よ

母れ何よ此物りうまつちて也子のまし

乃恩を號ちんとの何と

まのこみはひそられうと立おりきて

浮舟れ母のなおまえねつる方之常陸さち

あうりさまえ

おりましもそ三母のあへるまり

義
常陸の様まうまくつかれすること
うしろいはくさるんおいましても
秘
浮舟れ生所之
めいほくありてさしきむ
義
浮舟れ三条あ人生の庵まて如さに
こさ時常陸にかくしまし母の母ひとつ
色しきこ
よきさ人々しらくして
秘
此常陸守橋門上臈なとをいとしく

さよ包れあの人まこ　義
弄
常陸守の事よきさ人まてかしうしとこ
松弄ノ義如何
いてめてられ侍りさいとひを
義
常陸の浮舟のすをいさき通
そのまてと殿人（とのびと）にて
義
常陸も葦之家礼のすこ
まうさ物とものあせらきこそさか
常陸の子ともれませ

まことおほせ候ふは
浮舟君女房の時よりもいふかたなき
うきしかたとれ母の心まてもおもひ
あるもいまなんうちなきさけふ
浮舟君おほせし時ハ母のあはれにも心は
なくもいひしとこし出家常陸の源と
よなきとや
此のハおほせし世の中しかなきこ心あれと
松
薫乃君之浮舟君生まれは母の心之母

なともこのつれなきさうらひし
もののあやまちにてうらしなひとも
菜
薫乃御しく志ありて思ひみたるると
おほえぬへく今これ浮舟ゆかりとともに
つねのみ人有生なりハさしも有ましき
人のうへもねんよくしねしと
新
人のそしりをもいかねなれとし
かひなきもそのかし遠さかりたる母にも心とな
くさめんまし

いかなりける人にかありけむ

（秘）何ともなき非善をさしなきつるにぞ

私記ほとけ浮世の生死のくるしみを

らましめすをさとして菩提をや

とをくてとも近くうまれつき

（弄）浮世の身袮はとをくとも伊勢のはな事

の事は浮世の苦の飛らめることを

私浮世の生死ふ同前ねとも飛ては

あらしまし候ぞ

かの律師のち

（秘）此実めでし昇進をもとしみたりき

六千僧の出せなと

（何）六十僧六波羅蜜りしは六道に似て

ここそかりくる

（花）三代實録曰貞觀十五年七月五日辛未延之事

六十僧於紫宸殿限以三日轉讀大般若

經廿外六十僧をとめられ例なかりし時大般若

經轉讀乃為之又於中院乃仏名にて六千

僧請せらるゝ事定まれる例也七僧も六
十僧の中にさだまるべし
法（秘）ハ大般若を讀誦の時六十僧也
此法事もさためしの數也や　義　私
花鳥の所能べし
又常もさかえて
浮舟の母也　未考也
宮よりは左近のもとに
内侍よりハ右近へかりもろく内侍のもとへさまし

をも左近のまゝにしての風体
それを人の実にしなりとせ
とれ人ともおもひしなきさま
義　薫の家人ともこ
むかしのかくしを未考也て
義　常陸介の守藩人ありて東えへおもむきて
薫の家人とものも不実なりつ
もろきしきて改めかなり
唐（モロコシ）　新羅（シラギ）

いとあやしかなしき判
常陸介にし之とおもくしくむ
あひきもなくし
古乃侍りし九ちひさき中ふ
義 薫の君ひてうとし法華ときゝひ
ことなるも茶湯の流ふとこそは粋とと
まもるりとゝ
宮乃り匂ふを経しるひ
義 中将まり九熊しやせ

七僧のまへれす
花 七僧の前ハ僧食九事之七僧法会ハ甲
九曰ふをさこ五て講師讀師呪願三礼
唄散花堂達あまたを七僧といふ
宮ふうしこ御りきこてあ
秘 女二宮ふそうりてしや
義 みもの苦しかるへ
さるまの人の御出九ちら
白氏も薫大将と共ふ浮舟

秘

とゝのほらぬ事

白蓮之

かきたれしく

三まくくること之

いやしくありし此花ひとつありはなさきなくて八

浮舟かみを切よ歌さいまひさきは

白蓮はいけるえくしかさなる歌にて一般物

なほ中なりしかし

あさなる時色はなくさむ中し

白蓮あさなるをと云也浮舟の事

ありしを答しての思ひなさあはな

くしはいのれそてさまくしすみはり

なしそあるへく

かの厳ハくもりなくて

蓮の実しきさ色といへのさ花とく

てもしは常陸の子とも守清のかま

女房のそのをかへし

いよいよひなるき事

浮世ハよその是れかゝさし業れ然し業れ
時々ちのゆうちれとも未しそうの然あり
白の内ちの取りとミハ切ちの角りちれし未れ
そうぬ然ゆ人の作をしせて参り
手ハ内宮れ時ミゆりずて此時し
秘 式ノ石宮義し給也人乃煙腹之海人よ之
六宮度よれりしまれ之
弄 明石中宮の時分ちま乃石文れ世給ふ 花葉
二宮ちん武乃しても有り給よまう

元 弄 白宮れ時ミの之式ノ石の嗣よ入ちも
明石中宮腹乃二文れすけるて武家の
嗣之義
松 此式ノ石文二宮ハ音しして明石中宮
なる人と御し参り給ふ者之
六乃宮ハ時りしし
秘 白也
一条乃文れ時りた
白文一腹の時はねれ

よき人のかたちをとゝえ侍よしをなを
なり

一品宮のほまりゆかしきさ遣
大和國のからうしていと思ひて
からうしてとは一品宮の御ありさまゆかし
きこゆるなり

花
小宰相のかたをハ人の
薫代思ひてうらひの子小宰相ハ其も一品
宮の乳しはらからなる義

弁
一品宮代方の女房
如此しとをうきなれはまとても

秘
琴琵琶なりこし
古乃宮もこうしはいとひてもあり

秘
匂宮義

花
匂宮をはじめ人をとふきよは侍りの御心
さうは後さき意薫を思し給さら
めをとれくさ侍ゆひ給きけま
はかし思るまゝて

秘
ひさきハ陰毛なき人をいふ

秘
いはれは好人にて
白女ハ小峯おほき茎乃事をいはれ
なみなり

義
白乃茎をいひさらなる
ふかき陰しものにしきとうてハはなれん

秘
小峯相の色に白女これハとてなひかぬ
人をなくてのにもとんとあつかふ
小峯おかの色を茎よあつてなら白女ふ

はなひきをすんしといふ
私白女ハ陰しくく好色よおほいにする
よなひぬ人ハまま色なる心よふくはり
まあ人ハをとこし入りかてなりし

秘
茎之義

花
まあ人ハ茎之小峯おほく白女ふかくつきさ
と人よもそれきりと茎乃そひなる
浮舟乃まのままそかなる
かくおおかしかのさ海とも

元
薫乃浮舟にあはれ事をおもきこゝろなみをみせ
けして小宰相のきこえし御事之義
小宰相歌
おもほし出は人のみをたれかねかふめ
身よりきて流るゝなる
秒
世にあはれる人のみを皇てもねかふ
さらぬみとは流るなる之
か色ゝはときこえへき
异
後撰　草枕紅葉むしろにかへしと世よ
人乃朝出の頃しと

秘
此八浮舟のみ我身をとり色すゝりゝ之おもき
物よりよ物の色さうりし以此之川有
無し正徹室町殿まて此物語を講談
乃時川をなかさうしとも世に意趣
流殿の作よ
後撰十九
草枕石葉むしろにかへ色さゝ八此とて
く物あり御しや
こいやの奇志るへきゆしあやし揚月むて
殊しうもていし義

秘
青表紙三八
つまつきて
ありさ一段
の世の事を託
さまてに尤
あはれて侍り
我身に
天文二年十月廿

河
浮雲の末のゆくをおとろかしけささそう
そして一示文の小字の末我身よりか色
なりとみるとも又有右なる一節
物あはれなるをそへ侍る

在慈
なやりの事も知らぬにほひよすゝ
浮ねさしてもつらき世を見るうきはなき人
のあはれさてなけき有ける
世のなれ無常はふしまれとも人のあさき
結ふけく事は思ふことをしらぬる

比内はにたかはなし
二のあはれをとりわけると

寿
小峯の寺に蓮を見る八月ありとく
人のまなかりはあけらぬみえ

養
蓮の露を平生無常と思ひなれとも
とまほしく思ふをなにとも小峯の寺を
ぬしみえ
松まてら世をもろしは浮雲にもと
仏りもちていなかりけれ侍るとも人の末
ふりりはなけなぬをあらすとし

ちりはなくてもいかにや
古乃よろこひあられ有りけり
花
小宰相乃まゐひの羽をもちひそる
あたゝ筆
秘
いとうりしきにおもしろきをかて
弄
蓮乃さ海之平生けさうさ人なしかとこ之
蓮乃紅之小宰相乃紅といふ流あり
不可絶之
かやうのみなともよりもちゐ入り

人々も見え
ともきうる
秘弄
小宰相下ゐ
人とも人なり
こさ筆ちう
秘とも秘蓮
のすとるゐ

古れ紅ものうくしさすゆひとそとお
とうりきこゆは蓮おし活みぬ人やせ
さ人ゆくを見人ともを小宰相まうとも秘弄へ
あるきぬる
せめてはなきさ手りゆくち
筆
小宰相のうきの孔さ海之
花
見て人々りもこれん介かうき
見て人とは浮舟も出をいで
浮舟よりもさ　弄　筆

なましこゝろく出なちきんけるおもて神ともい
きこゆまし
いそうちきんとは宮仕なひはいうしきこゆ
事之をいうまし八我りをみとく思ゆ
ほりしおもとれ也之
抄 宮つかへにハ出ちりとも之義
異 心みこさ人のなそうハ宮つかへよ出きんとも之
をいうまし八葉れ心よ小字おもとそう
人みてもへとさたちんみけくうぬへおう

をもし之まて義
花 人来ぬをちハあそてもとも世の
葉れく之みをちをハおりもあて世の
いぬこと之
抄 うけらるまでもてあしのこゝ之ま
異 小字ねみうれしうつ事ハなきこと之
私只今いうのほしうま之ハうくま之うるす
はなさきにくし
こゝろあれ花のはつりよ涙八行かりせつ為

花 中宮御八講之

弄 明石中宮乃ミかりもせ給也六条院ニ
ゐれなるへし 義

細 集まなるも此物語色しれ事ともさきも
てゆくハ此花ひやかてちるとおなさ
こゝろ也 あまさ波をいせかる也
私此後卅ハ有人かし不審

孟 明石中宮也源氏紫上共二の御事也
おひのまゝ也

五巻の日なとは

細 薪のかり也

中日也 提婆品乃日也

大日ともいふあさ座ニいて

花 五日ハ結願の日也 朝座ニて座にりし
の紫宸をとりてのしもあさむるを云也

細 五日十座の御八講之

孟 結願の日は御座をうつる也
こたしのかざりをとりさげ

法堂の荘厳をいつきむとすりさけ
八難遁之よりのかるゝ
少女ひさしとゆりしとせされち
寝殿乃小西之東は西端なるなる
西よう法りある之
みしのまごの女姫君おりまり
花 一品宮乃御方之 筆
弁 一品の中宮院の門前し西寝殿
まて八講をこなはりきしや

物きしありして
花 あうは園ここ乃かみをこうしと云おもよ
こきしそこひきさう人之
大殿あまとしきさうありて
弁 中宮法八講の後之
松 八講八まさ之本まれしいつきあるを
筆 薫乃訴之
そぬまろつう儀の中に
八講の前の儀あるへし

はま殿のこゝに
心敬(義)よりあるへき人とその道
みちまうてぬまは
僧都乃ゝやく退出しける之
かしこ宰相乃君
小宰相(兵)の事也
おほ小宰相乃かうはさとひさまいかて
いみていのり
さまの人のなさけたひ

よれは絹女房かとのなかうはかされ
由なり
これしくしきつひ
あてに一条のりみたるまけれませ
ひを物てかたみをとことしまとて
延喜主水司式曰凡供御氷者起四月一日
盡九月卅日其四九月日別(コトニ)一駄以八顆為
駄准一石二斗　五月二駄顆六月三駄又曰
凡供中宮氷者五六月日別四顆六七

月六顆今案氷物ハ六七月比あつき時ハ
加増してもえんつゝさりしをとこそま
けりえと物沢よりありは中々へるてま
つりありあり候し

何
仁徳天皇六十二年甲戌五月卅歳額田大
中彦皇子猟于闘鶏時皇子自山上望之
瞻野中有物其ハ形如廬仍遣使者令視
還来之曰窟也因喚闘鶏稲置大山主問
之曰有其ハ野中者何窟矣啓之曰氷室也

皇子曰其ハ蔵如何亦奚用焉曰掘土丈餘
以草蓋其ハ上敦敷茅荻取氷以置其ハ経夏
月不泮其ハ用即當熱月漬水以用也
皇子則将来其ハ献于御所天皇歓之自
是以後毎當季冬必蔵氷至于春分散
氷也

かきねふとききみとしさす
弄
あつき日あまたハちとうし夢乳の枕もとれや
おきもとはあるはやかりし

箋 皆らうけたる御講事ハ蓮盛ふ女一 一品宮

宮おはしましてハ

志ろこきうちとまおもしれう

秘 一品家也 花 箋

みなく人も何しさなきまりて

箋 薫也之

書之なりし人ハ後にこつらかりものなりけり

河 顧前後左右粉色如土 長恨歌傳 箋

秘 長恨哥傳に粉色如土とあるも貴妃の事

見しは其かの宮女ハみれむ気くゆ

しい御之

こさなりひら色うとえ多子の事

弄 上らうしくみなりけるしハ小宰相なと（へ

秘 扇うらつひらかみをらいはつむやつと

先しもとしへよくさし女の扇なと作らす

と用ことあり（こま字うるや 箋

中くわかのひよいもうしきて

花 氷をとりて人々に小宰相者のら給之

歩をとる辛労なりとや
払氷とまちあふよはむしかりけん高かり
る歩をとるまて辛労かるはえりてあり
かりしかりんとや
まくけかりつこゑし
秘
氷をとりえさるか白只は甘し雲のをりし
義
ましもにとけし小峯ね雪れりし
去り紀きしれ人とはありあり
秘
小峯ねし

義
今れ森つひかるとけ人え
しらにしらをよむねよさしあて
深しの人れさ海し
秘
こと人いかにけしこて
こよの人し
私別の人や
かしにけしみて白
紙よてこそ物さるし
世の人よ色をしこかまりつせ去れし

一 茶之し紙よ浅ミてあせらるとや
いとりくしよれもを
一 茶之の流さ候
ありくもあし
よよ於之て步のしらるさ候
まるいとちいちく
養
一 茶几之の ちいさくお世しは葉てたさ
なくてよててまつりしるもとる出之
まいの唐とう源おかもいかんと

葉の色え也しや又おとりんとや
さされし女そ何をおつかりさる
花
ちらしのすハいろきさうす何りて清子
をとと川さそもしてつね人かりさるとも
養
下らう女の用家なまさ候
まとひいり
あまても同しくさしらぬさ候
このあそしきらくを
養
葉之し

やまちさへにこゆ
義 うきかりの見えこし
このたもと
義 まとひきたる人と
たの大殿の井からあらむ
弁 薫もうとうえよ人あつねとも許せ
たま絃をぬ人まて人をもちきをへし
よしあとてし
秘 夕霧れ中子さらなり絶しもや

ひとくよう由ともくしなありと
花 薫のさまくる出衣をうさとり草も
揉もとそくしきれいさやかぬかりて
ゆへつきぬをぬまやしとえり
秘 もとしあれいあらいせうや 義
花ひおりしてとり
思ひ園してこふらしくともえ
秘 此様女のかつひとせこ小宰相かいひし
綱又うとにまてさうこ海一ふか見れ

同又下臈女房の雑かれ之扇をとりまゐれ
てまゐりしけさ候く女のちれ折まゐり 筆
奉
人ての御用よりてみてさり無くはなを
よくれけさく御みの小字扇お侍はまゐり候
らよらうをれ扇とさ候おもく八ちれり
雑とみてさり又もちゐ無扇れさ八こそ
こまよきくうう扇しく候けの御けたし
うまさうり
うれ人は御りくらりまおりし候と

秘
書て一不文よりをとめのるつまゐ
一みりくりめてさ候くなり
筆
大書れ字より おとりて得ら無れるよ又
小字扇お書てて又一不文をみまきてまゐ
まて書れを候て
筆
中しはらみてまゐらやと
一不文をとめてまゐりて梅のおきて
秘
中くろしくひなるつさ
みうあるてまゐりまし

女らやのはらりき
花 花ハ薫のはあつりれ女二文れらすぇ
秘 女二文之
あれにもまらり浪ま師の人こさ事のは
一 一不文女一のらかりを女二文よ海さりんす
いれしとさひなせともさうれ郷縁女之
あさ海しかまてあてよさり
一不文れ師まりを薫れ之子なき
こま一りりをれはら

一 一不文のりを和をさきのひらハ女二文よ
ところせみてまいりてらむとく
あるくにまいりて
弁 女二文れ師方の師方よあらりし
秘 女三文之 薫れ毋入合 女三文之
大武みらとあれ弘人のはら
花 一不文のこさみへり沸ひらんをとまねひの子庭
一 大武ハ薫の官女之
はりにおりまれをとまてあやしまさせ

筆
女二文字を薫れとてさやさしき女房な
とハ云也
是ハ乃御様人を
秘
薫や
乃頭ひつりゆう
白きうちを物れひとくさ
秘
おりこハ乃てまつりん
なおふりにとや
筆
ふてまつりは進ノ字也　尚衣正進畢

雲裳させ乃てまつりぬる之
人おりしかるおりがむとれさうねさうる
秘
人乃をしへみゝをき閉しれ出ぬらまは
ふかしかりしとや　筆
ありそくにおはせり
花
侍側之とれしくしかりぬとるうきをと也
走とりはおん御前ん
花
何人ハ殺衛之人乃ある所まては落
ことなしを何人てきおんへことにふり

ぬきうち
流も肉も此のれ引しなり
花
花も一不文の流さてと以て
義
一不文のけさりそうれしく女二文小
きせ人の心さましとをしまろ如く
私一不文紅の誇さのへうり前は
ちうされちてまてんとり
御くれ女おさすれなとは
花
流くの地まとうにてりかれしと也

ひめして人くしみまいう世路
義
花も女一と似せうる
此る女一文一不の氷をとてあつひ添
そめ浪れ見之
也りて日より そてまつまなとしま
花
古まても小字桐歩れ歩を一不文ゆるゆ
てまつりしみをとめ出て茎風ねひ
振舞之
見のうちもとらし

義 薫乃此の君事とおもひてかれく
しのふ残り年にをりきをや
思ふよりさて忘しよ人の人ハなをやハらか
秘 李夫人乃事也
弁 漢皇李夫人事前ニ感一し
義 絵ありさてさんのなあのあかきハ
此兄弟これハ似のよへさうすうき
此句を重ねて見れまうしなる
一品宮此仰事ありそをうりやうせ

一品宮ニ仰ありしは石をてまつり給ふも
弁 一品宮の御みのさをゆうしく
おゆ事に薫氏也
秘 薫のとひをて
内よりもしけう絵乃されは給ひしをは
秘 女二宮の御方之らしハ内裏乃御文
私内ハ内裏らしハよき也 義
多く人にあらし世給ふりとて
義 薫の御女二宮乃薫に具しの女房よ
そして此世のしうこうまでなきさへて

大かりれまへまてらしみ
松
明石中宮也　葉
いくらみきちらん
松
女二宮の詞　葉
げにたありしまうりまて
葉
薫の詞
松
くり庵しまも
おもろしきこてぬ
女二宮ハ昇下して嘉つ豊からね八

ト庵しまも
大宮ゆまいりのよ
薫の明石中宮へまゐりまで
まいれ宮もおりしまり
花
匂宮の事也
あやしにかくかさからをかれひとく
河
西宮あたれ宮月比丁子染催をまつ飾
しめ花みえてゝり
花
丁子そめれ紅まへつさ紅り夜さらあ河海

よみてかうもおほやうあり表衣とハ夜の直
衣にさき花白きうめかまた似たる色なれ
白家ハ北の筆ありけり両様つけ
女乃中方ありけり御父て母ありしかともとる
筆 白をも 女二 一不一家みつくしに施し
おもやせたまへる 白花おもかのかひし後
秘 白宮女一家みよく似たるり 弁
おはしまして上りかまはし
まり思しおもと

筆 萬乃なし一不一家をもとしなし
なといひもおほくありさせて
弁 白家乃りさせて中家の事りなし
花 白家物もしなし
女房して何かしみ
女一家の御方へそ
む 一不一家乃御方へ流縁をまつりせ給て中家
めて家みゆるへ文おりなくかくまいり
よりのみなし

弄 白き冊子絵ハ
まかせたる
世にまた無也
まかせたる
と女一宮
の方へ也

これはれうせさせたまひぬ

白き冊子也

大将とらへくまつりより給て

秘 中宮乃御前也

いかにも人々御事

秘 源氏君上よりまし

紫のうへの絵も絵は給ひてよ

一条宮之 まいりける絵は物の如くし

さてさまにとのし給みさこの

花 女二宮乃御事之上乃御方にハ大宮乃御事之

まてうつみきさむしあはせそうしけり

ありつる

秘 女二宮也 箋

姫君の御方へ御せうそこありてめでたき

箋 一品宮乃御事之

かくしのあそびきこし物せさせ給ふべきなむ

花 絵あはせとして

秘 絵草子あはせ也 箋

弁
冷泉と女二宮へまいりせぬ人よもせ
なかしう思ひ給ふ人ともみかとも
係しかし
桜
薫乃御思ひて得るハさは由となくし
ひかるへしとの　筆
弁
薫にそむかれしかは女二宮由ともなく
りひかるへし女一宮より来りをめへかし
かしてきこえし給ふ人
桜
中宮乃御親之　筆　弁

こころくまれ給し
なかし禁中ゆへうたてそりおち
いまうしめりきこえてむ
一品宮より流せうし、何事ても北の方
さむとの明石中宮乃御親之
これよりとかくはと
筆
女二宮うしも何とて流るつまなさ北
とや思しめ石の御親之
かれよりはいうてしく

秘
蓮乃胡弁 義

わしりかくまへんと世にはいさらんとても
秘 ともよりうしゝく海山ともしハ
ともにたてしく成のへつ地ととて
弁 わしりうくよりつ世に人ありとも
蓮乃宝なれハされまぬ中りにとせて
しりかをかへ人のへつきめてうしとやにて
根蓮明石中家ハ花も共なれハうくやの事
さとしきさしなれにかきんをいまとやのさせ

にえんはうし事
義 おハりうよひのひし中元寺今うしとう
とさし事と大家へ蓮のうしこやの事
ちさえこうきしれあるとは
義 一本文をと蓮れとるうけ在てしやうり給へハ
たるま給へぬ之
義 蓮の下にありてうしやまかと明石中家
ハえるま給へぬ之
ひし東乃色さしれ人のはかり

花
小宰相君の事也　抄

あましきさ敷もなくなめふ又人うしと

秘
八講乃時の後也

弄
八講の後女一宮ゝ渡りし方の事

みしき御みおなくまりを

弄
女一　一本　文のゝ字之なりきまり

左乃大殿の事なりら

夕霧の御子なり之

大ゝ殿のみはまかりなり

抄
薄の絹なり

志乃れきれげなむ小入ものかくて侍るは

弄
女一文の物うしめても薄にきさし給ふ

なかきさを云よし

花
弄ノ説内裏にてもとる事に就の云

てもきれかしくと其とるかをと見えるを以

花もその他に薄の中の所也

一本文ありとおもしろくもあるてゝ海人へき

よはりきと

いまはむかしと花ひたらし一夢
霞ハ何しきつむらの事や
あまつそらにしらるこさんへにめりなかん
弁 なかりのかす
菫 菫れまさへうたらしきとタ霧れ子
きちのもらんとて
花 といのきんうられちさを
夕霧左大臣乃君達せ
松 夕霧れ子へうらて

いまはむかしハ世継より
松 女房達れ顔て
をうしこさゆうされあはさ由
一品家の女房あしまそありくしさあ
うりうとや
姫君ハあまさみれこう世継あまきま
花 一品宮ハ中宮乃ゆうさへまうて世なうて
弁 中宮の仰うさへて
大宮大将れうちさこよまりつうきに継

弁
大夫ハ中宮亮

秘
明石中宮乃女一宮の御乳
ゆるしなくまいりける大納言君

秘
姉君女二乃御めとこそ

小宰相乃君は物の怪人と

弁
大納言君ハよしよしの御乳也
まあ人乃けしきにも人々心ちよき顔して

秘
明石中宮の御乳
私まあ人ハ姫也

心ちよく思ふ人ハ合ひきれ
姫乃ことかけなる人なりは明石の中
宮のくるしき御遊也
こさいおもかけはいとうしろやすし
明石中宮も小宰相の君は能人さ物柔
をそ也
けしきをはれとしく人をとからいあってこそ
思ひまいれむ

花
中家も姫大納言君男見ゆるまて筆

松葉の色かはらぬ人なきハ見へてなかりき
色とられてハいつしか昔となし

秘 人すまはむかしに変て
大納言殿の御絹

筆 葉の小箏絹よハきこしめしおはします 弁
まいりのめされけるとちかハ

筆 色やとく東なとありとちるハなしとや
宮とところいとなさけなくおほしめし

花 白文御箏之なさきまれておいおもてに
あまひて小箏ね氏れいくへとはありみ
そよしまつりしと

秘 小箏ね白文之ハつまニ参るへしあるとて
白文乃おまさき有しみられ給ひとて
小箏絹なとも以へ申させ給ふ 筆
文ものらい世にていとみやりまいらせ給 と

花 は文ハ中文をとりし 筆

弁 見ゆらしきハ白文のまう
そのやはり人てりしの給

孟 匂宮の好色を小宰相の君の見知りぬれ
をれなるへし
いとあやしき事ともなり
秘 大納言殿の北まにかゝりけるや
あくかれし給ぬし人ハ
孟 浮舟の事をいふ也
宮乃御二条の北のかたの御妹にもありぬへき
花 匂宮の少将中君の御せうとして浮舟の御ゆかり
とはいはるへし

孟 中君浮舟引接也
ひとつのさきのちゝすけしかゝハをともちとも
孟 常陸の妻を浮舟の母とも御母ともいふを
只実母を人のまゝめ
花 浮舟の親母とも又母とも人のいふ也
宮したひて
孟 浮舟に匂の志あるのよし
御忍ひ事行うつせ給て
匂の給仕りりゆゑてえかゝけるかはりけるし

女も文をたのむひきまして
美 浮舟も自らせうそく
文もいとあさましとおぼして
秘 明石中宮也 美 花 弁 中宮の御事也
事なりけりとはいふよ
明石中宮の御詞也
宇治の文ハかうのいのちなんしかさす
美 八宮の一期の短命なりしと薫の
事なるべし

いさやげにはゆかしかりぬすとも
秘 大納言の詞也
かしこにものまうでトしもましハかのさきの法華経
さうしなり
弁 小宰相のかたにきてさうしけせ若経等
かけるの下事也
宇治にある事ハ下まりけるを 松 此義の能て
以上 弁
弁 小宰相かたりきこえさする事ありかやまきぬ

おもしろくしくおほきさもあり
寿 たるうしさや
ゆへにくふる文まのよそといくせよ
花 中宮乃御綱之 又かりなりともあせそと別
しるさ之
秘 中宮の御綱 美
義 流力をもまてそこなひ
白の御力からとくかしく中宮様御座之
ひめ宮御流なるゆり

義 女一 一宮 宮や
女二宮みれせうらこ
義 薫れ女二宮之
流れなをのいとしらり
一品宮れ御子絶之
もてまつみるくまきれして
秘 薫の包之
義 かくてみをとらぬしられしきや
大宮もくなてまつりせ給

明石中宮よりも女二宮へ絵をまいらせ給
ふらんと
弄 女一宮より女二宮へまいらせ給ふ中宮
もおなしくてまいらせ給ふ也
秘 大将殿から御さまにてそうしこさとも
薫より又まさしける絵なとをたてまつり給
の也 箋 弄
箋 薫より御さうり給はるゝを女一宮へたまはり
のよし

さきは川の大将君乃女一宮を恋ひかけたてまつる
花 薫大将の女一宮をとおもひかけたてまつるにかれ
思ていふなり
秘 此物語今の世に伝はりきたるは匂薫
乃代まての事を書られし物語也
箋 十帖あるへし
弄 此物語これ世に伝はりきたる事なれ
思しきを帖十帖に書てもあるは集とも
河 古物語云 水原抄云 遠武 又十帖あるよし

此一帖依成自筆の本をうつし侍り芹
川の中納言といへる恵心僧都の勧女往
生義といふ物に見えたるの中納言芹川の
物語伏見の翁かたしといへる物語のことし之を
見給ふ世に不侍此芹川の中納言の事
の歎き
ひてよりつかさをとりつかさ〃〃まう
弁 恵ちるかなひかしせし事なきし
しるらるほとおはりしもなひく人のはなりは

芹川の大将物語にあるうたぬへし
弁 物語に女一宮のおもひける事をきくは
兼 荻の葉に露吹むすふ秋風もなかきさて
身にはしをも
話得らし
兼 夕の風にききて身にしむをも女一宮の
ありのまゝにきこえしらせひけるにや
かきつくるもいはなし
女二宮より女一宮への御歌なりけむ

こゝにそまうけまして此事を葉のかきらく
そくとみえた
おもとらしてれをそてハむかしの人物語く
まうしは
(花) あけまきさの君のまうる也
(秘) やにうくみ大君なりかり給ひ人みかり
浮舟のすもいてきつまても
(弄) おもひうけても宇治の大君の事を文
そひ出しつると

時乃みちのけむしまあをみとも
女二宮の事をいふそ
まうけみさりかくらしびあかれと
大君をさらして宇治の橋姫とい給り
(秘) 宮の人みやりかくまて
中君乃事や等
(花) 何さめしもてうせにし人の
(秘) 花よりハ浮舟君のまをい給り
浮舟之

せくこほれなみのきわかゝりしさ
箋 浮舟の心ゆかさる事也
まかせしれまいらす深し
箋 埋これたりとも乃哥よの中人あまたあるよし
紫やとくらうるあさかくこらひ人みて
箋 心乃をかしくおとはなかりしてあふちさ
けらうしあかりし人ありし
宮をとこそひきとしし女をとらしとも遠
秘 匂宮をも浮舟をもうしみあ薫の

をとこあやうきこと 箋
秘 心えぬにさ申しくれなるす人あまたに
第す地し薫乃よろしきて川ぬ
人へうくて
箋 薫の性をと白すらくてこそ 秘 正筆子
地といあめや
かのにさもにあるぬきをとも
箋 匂の側之浮舟のよしかの形心之
あいのれかあらかりつる

峯 中君之

かくしもこそあれ何ハさまさまの
浮舟は別段なりし人なる其何の兄
中君まてかく辟ある之

峯 あしやいしやあしてれ侍りん
匂宮の中君之対しゝ浮舟をましき
かくしとハ幸ゝの侍ひかくしと之
めれしおの人ゝかりある
峯 浮舟のあると之

松右近し侍従より率ゐ
侍従ハとりの人あれハ
秘 典ゐて右近なをしとりハうとき人（ありし） 弁
松右をハ乳母子をし中侍従はなかある
尋宮乳母なうると之
うまししよせとやかりて
峯 浮舟のれは時ハ来る母なりし之
弁 川府

京にまかむあやしれ所に出給てゆかりあり
侍従宰相より出家しける之事
かくて侍従一人もなき也
白女の御うしろみに侍従一人と侍従よの縁也
侍従はさかおきて人ての[illegible]事
侍従か叔母の侍従は白しうしと人口[illegible]也
侍ら事し此ちまつりしまめり
中将兄弟まては丈人ありねさと給也
浮みれうはさまたにつ帝てさうてさ

事多くしもあなた
こさ侍は乃女ゆみまいらんも
中将之
明石之
侍従は中将之妻なんともゆ縁也
いとよりなりさそて人されしても[illegible]
白の侍綱之明石中宮妻人の縁也
白乃母后年まであまれし侍従をあつ
りんとし人さまをとまてうしくおもんさし

きみまかりしと見えてまいりぬ
（峯）侍従明石中宮へまいりたる
ようしよ下らうなりとも
（峯）侍従かたる
大将殿もつねにまいり給を
（峯）薫をとこて侍従か御かれにきこえたる
見て姫君のしおかしきかはとひたる文へ
をいかと　なき人にまとも此比の中
文は八かまりしまゐりたるを

なりしめでて見えて
（峯）侍従か申ししゆひはくらるゝ
なをとここそまゐりし人に
（松）浮舟之
（弄）浮舟に似たる人をおもしろし
おのまうせ給めりつる式部卿のかはとある
（弄）くけたまれ残りなれす　花峯その姫君
せうしとれむまのさしみて
（松）継母の兄弟

弁
武蔵乃少将れ按察しいの右馬頭に返
人之
こきうしめれ母より随ひて
明石中宮の侍しめをら之
又父れいとしういつき給ヘり
右式部卿宮れ中明石中宮の御姉也
也ほうしくれしおろすけき給
式部卿宮の姫君れ御之
まつ給れ給ひする

案
明石中宮の御方に給へる之
御せうとの給ふしいひて
秘
蜻蛉乃式部卿乃宮の給ふ之宮の君れ
兄弟之　弁　案
姫君れ御ぐして
案
一男一女の御きされ宮とうとや其八一帖
秘
宮乃きみとうしいひて
捨遺れし葉をさにもかり
河
拾遺東三条院の寧九月九日れかくみそ日

いてきたりきりみ宮の貴ていひ出る人の
りしにはつりしけり
古来諸公曰
雅ありけるをもひんらんひをも御尋
らひなききりよみともの原
秘
裳ある事ひきさうけまつていとあはれなる
こきぬを略しまの又文字めしとしもとめ給
はらひのひしおとこや
弁
前の色人乃風しみて礼義み賞ときよみ

それより乃胡服ゆるし武家にあるれ
これ異乃様に可為
私女のこあみ裳唐衣きへなり八男風なり
らくしきなし同し礼之事は年中さ
めまていさ様八もしして裳つりとい礼なさ
身の成人しこうときに賞ときさう事や
男乃様まていつく陪様の小袖み種なう
りよみらう出立之
美
或る口文にいまあゆへりし裳ありもしか

きのふをはやくれなゐとはいはで
立田この花ちりりや花しき人はしといひよ
うすり色なき
花
春乃花を浮世花にといひより人まて
又みるとしてうらうれうしとれなる色なる
美
春しき人ハ浮世
ちりみこはそうかしれうし
秘
浮世しいここ之ハ家も武る白富兄弟家
ふをとい色あり　美
まいの浮花なる人をとらひ浮世つをてを人ゆ
うしき
白花浮色をとい浮世乃春しきなりさ
めみとをや此春の花のち浮世まで
美
大ねりしうしききまても何事もさされ
白の色を菫乃りもかしくをそで
此りたねし浮世つり春家よやすをなりし
きみとも春しきえまけ
花
家の花を又家の浮世しくしし　附録

みなもとハ葉なるとしもしさくんとかひ
しけや

秘

此哥乃意をときいはんとすれハいくロ
たしかにや作る人よ出しそてある事れ
たとふる人をいへり　弁

案

哉乃名ハ姫君を玉宮乃葉乃人といひ
あひしとや
あれそこに心をしつめてこれをしらる
ぬるにより

ゆきぬことをうたれそふかしとも

弁

右と我かわてかくれこそけるか
しされ枝そふとや

秘

名もしみ出物そわりをは思ひぬる
さるめとことなわ　結句思ひの中にあす
ともあるとや
おもひこの世ふとゑなる物をしれハむつかしき
人の心を当世の時ふあるとなしとある
抱なれし誠なかとれ着るわりの友も

なきかとそむかしれと我いにしへつき
しのふに当時をそへしれ雲那
昔やその時よあはれなる人ハむかし
まれなこしぬる也 抄

うちかくりなくき
此物語にむかしの事我かたりいて
きこえしいそかはそれなる事を
こゝろよりの色イなきかきは
心風吹となかれ三条のさきふる

せあり

ゆくていかにつきしそ
秘
源氏あふさこぬゝし給ふ人むしろ
の女ハなをく御かはして女御ハか
やりみそれ是御しまるはさしき
とをしいかてや給ふ頼や

みないにしへなる世なれと
花
ちるさとハ女御の御事を源氏かたら
ひ給ふなるや

秘

女御の御かたへ　花鳥によする恋

めのと

私いとけなき世にまかりしときより

おさな世より女御に仕へ

みなさまあまたの世にかはりしきまて

かしましく源の相をたのもしく思ひを

あはれみ見まゐらし人の御さいはひし

みやこ八源の御さ海れもしきるなれ

うら一夫あいまへみこゆる

近衛

人めなくおまこゑかな宿に梅の花も散

のつましく成けまし

秘

南ゑをおりれましなるかた

私梅の花ちる里をたりぬると源の

れ人に梅ゆゑこそとはべりし

まれといなく人しうらむきさらぬ

あかの御さ海こそ花ちる里ならぬ

似る色し

さる人も人めはいとおしなあれなわ

同書前よりましまさてくれやうなる
御於ほしハなわしかるべきさ
事也以下人りおもかるく源氏ならぬ
なり

秘

春院乃御時めきけ女御なとハくれて
しなとハ形なかし我今のせり
ハかやう乃人をまれなりとおもふ
らんと也

只案さハ以へとハまへ君をし里

絡し中川あたりに此宿なとは似
有へくもあらさる乃心乎

只案以下細字上陳し一てはさ
抄云秘し只案とてのたまふる
義於用つかなし

みしたはくよハのきしなく

秘

花ちる里のとみなくなきし
源の思ひこそありける女御とも
包まし体のそのやうはいふ兮よ

まさしおくとハいへ所を
はしさるとにまかすへし
秘 久しくなりし比詞のことなりとも比
此おもさ海よく思ひまよ〳〵してこそ
私花散里の心を案してこそ
花月さる事にはあらさるへし
抄 俳諧あるましき事と花ちる里ハあり
語よし
源の此心なき花月さる事なとある

まさしくハかたらひ語りしと女の思ひ庵
しと心にて案してかたりしを
さてはあらぬ侍語りぬきりそ
関云説より草子にとし　式抄曰
源氏の語人の中よりさのしあるき
きハなりぬ人をあはれとて
さ海くみ体まくいかにあはれなるに
物かしハみはまきみもや
いふなひさき語の人にて花はなやかなるき
やさし

よしありて我と人と
秘
涙のかゝしなり我らしみをして
ある人ハ此世を安星之さりほとり
始終おもしろく我人之心をしる
乃れもうに独人弟ハ此哉らの里弟
一とみたり
我と人ハとハ涙と女とれあひての
事や
それとあひ給しも

秘
わすのゝあるとあひあしも然
て寺面ゝをらしの人絡字り寺を
なきさく涙の性て
私それとおひあしとハともしの
あるとら給くしくらしみて仲
ゆ女の人をもあるくそれをとり
としをらく涙れらりん絡乃ゑとし
河
花右
とたくみ
世乃さかや

何
世のなひれ　絵ようしぬ増之
悪乃字の義れ
たとゑなし語
係れ然し
ありはかゝる事とさやうなし
秘
中川のやとれ事し　花月
よ人乃中川のやとの女とこねしと
らうえてあつぬられかれいてさうら
人といふ也

已上第子乃地をみてしかり
秘抄別勘　奥ニあり
一ようなかちしをあつさしみしくて
さまをよく好のありまたしとて
てしみの色きゝ也
一わさしらく好し語の毎り
まさしゐしく係れ仕方ちりと
てあさうてるすのかりれハ花ちの里
れ仕方よりは四方はくさう色ここと

一此巻浮の顛倒に見ゆるとまでか
ありそみきぬ坊のの下へこの比
のこる事なくたゆしみゆく
世のあはれのくさ/\下の行
をいまだ思ひ出すよはのはなさこ
もと坊のる人に清めとのもてし
えん行つるぞとかしより調を
いまして思ひとりて五月雨の
のしくれしくみゆる絵

一ちよなりし花しぬきりし事ともすれよ
これを大かた世々おこゝろ批うけしかく
の流れところ/\いまして見えし書れ
此巻より此ちろあり
一いしゆりなりの世うれしと
さりゐゆとかへせしより何事も若
けにしくりをあらてゆりうかの世
ろまにともこの中にも伊と批何れし
なりし人坊なるべし須磨の巻よ

ことはりき多き事なれともありし世
のはなありそめてあまたとあさ
らはりとハ思出こそなく願ふ人を
以て綱とみえて多り思召ありをつ
事なれとなをといふへし
已上秘抄の奥に書入
此書極秘也